第 11 章　コロナ禍における子どもの発達と適応

齊藤彩

（1）はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行という未曽有の事態下において、世界各地の人々は「新しい生活様式」による日々の暮らしを余儀なくされ、長期にわたり生活の多側面における制限を強いられることとなった。日本の子どもも決して例外ではなく、学校の臨時休業[1)]をはじめ、新型コロナウイルス感染症の流行は、子どもたちの生活に大きな変化をもたらした。新型コロナウイルス感染症の流行、そして流行の拡大に伴う生活の変化は、子どもの発達や適応にどのような影響を及ぼしたのだろうか。令和２年以降、世界各国において、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもの発達や適応に与えた影響についてのさまざまな調査研究が実施されてきた。本章では、新型コロナウイルス感染症の流行による危機的状況下、すなわち「コロナ禍」における子どもの発達および適応について、国内外で得られた知見を概観していく。

本章で扱う知見は、主に子どもの学校や家庭における生活の実態や適応の様子、また子どものメンタルヘルスなどをアウトカムとする調査研究により得られたものである。対象とする発達段階については、日本の義務教育段階にあたる年代の子どもを中心とするものの、調査研究によっては 18 歳以下の子どもを広く扱ったものも含まれる。具体的には、国際的なレビュー論文の知見を紹介した後に、日本の公的機関や各自治体等において実施された調査研究の知見を概観し、さらに日本の民間企業や公益財団法人、大学等の研究者によって実施された調査研究において報告された知見を整理していく。

（2）国際的なレビュー論文

１　子どもの学業成績に関するレビュー論文

令和５年現在までに、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもに与えた影響に関して、いくつかのレビュー論文が公刊されてきた。はじめに、本項では、子どもの学業成績に関する２本のレビュー論文の概要を紹介したい。

Hammerstein et al.（2021）は、令和２（2020）年春の学校の臨時休業（school closure）が初等教育・中等教育を受けている児童生徒の学業成績に及ぼした影響について、令和３（2021）年４月までに公開された 11 本の論文のレビューを行った。11 本の論文には、ヨーロッパ諸国、アメリカ、オーストラリア、中国などさまざまな国で実施された研究が含まれている。レビューの結果、令和２（2020）年春の学校の臨時休業は、児童生徒の学業成績に対して総じてネガティブな影響を及ぼすものであった。臨時休業期間中に実施された遠隔での学習によって得られた効果は、夏休み期間中に全く授業を実施しなかった場合と同様の水準に留まっていた。すなわち、遠隔で実施された学習対策の多くは、児童生徒の学習によって有効なものであったとは言い切れないことが示唆された。特に、年齢の低い子どもや社会経済的背景（SES）の水準が低い家庭の子どもにおいて、学業成績に対するネガティブな影響は深刻なものであった。しかしながら、臨時休業期間中の学習において、有益な側面

が全く見られなかったわけではない。例えば、学業成績の低い子どもは、臨時休業期間中に体系的なオンライン教材やソフトウェアを活用した学習を享受することによる恩恵をより多く受けたことも併せて報告されている。

続いて、Panagouli et al.（2020）は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴うオンライン学習の導入や学習方法の変更が、学齢期の児童生徒の学校での学業成績に与えた影響ついて、令和３（2021）年７月までに公開された 42 本の論文のレビューを行った。42 本の論文は、ヨーロッパ、アジア、アメリカで行われた研究が中心であるものの、アフリカおよびオセアニアの論文も含まれている。レビューの結果、学校の臨時休業（school closure）は、すべての学年の児童生徒の学業成績にネガティブな影響を与えていた。特に、低学年の子どもや発達障害のある子ども、特別な教育（special education）を必要としている子どもが、より深刻な被害を受けたことが示された。また、特に読み（reading）と算数・数学において、コロナ禍ではない通常年と比較した際の、学力の低さや学習の困難度の高さが報告された。コロナ禍にある児童生徒は、メンタルヘルスの問題やウェルビーイングの問題を伴う“学習損失（learning losses）”に直面する可能性が示唆された。なお、コロナ禍における学業上の損失が報告された一方で、オンラインでの学習が児童生徒にとって有益であったケースもあり、そうしたポジティブな効果についても考慮される必要性が併せて指摘されている。学校の技術設備への投資と、デジタルコンピテンシーに関する教師のトレーニングは、優先して取り組まれるべき事項として挙げられている。

２　子どものメンタルヘルスに関するレビュー論文

続いて、本項では、コロナ禍における子どものメンタルヘルスに関する３本のレビュー論文の概要を紹介したい。

Nearchou et al.（2020）は、新型コロナウイルス感染症の流行が 18 歳以下の子どものメンタルヘルスに与えた影響について、令和２（2020）年６月までに公開された 12 本の論文のレビューを行った。12 本の論文の半数以上が中国で実施された研究であり、その他にイタリア、ポーランド、トルコ、アメリカで実施された研究が含まれている。レビューの結果、新型コロナウイルス感染症の流行は、18 歳以下の子どものメンタルヘルスに対して総じてネガティブな影響を与えていた。特に、思春期におけるうつ病や不安症と関連することが示された。その他にも、強迫性障害、身体症状、精神的苦痛、行動上の問題の増加など、さまざまなメンタルヘルスの問題とも関連していた。具体的には、ストレス、恐怖、心配、懸念といった新型コロナウイルス感染症に対する情動反応が、子どものメンタルヘルスに関する転帰を予測していた。ただし、各研究の質の評価によれば、すべての研究の方法論的な質は低～中程度であった点には留意が必要である。

次に、Ma et al.（2022）は、新型コロナウイルス感染症の流行が 18 歳以下の子どものメンタルヘルスに与えた影響について、令和２（2020）年９月までに公開された 23 本の論文のレビューを行った。具体的には、うつ病、不安、睡眠障害、心的外傷後ストレス症状の有病率の算出と、それらに年齢および性別が及ぼす効果についての検討を行った。23 本の論文はいずれも、中国またはトルコで実施された研究であった。これらの研究結果のメタ分析では、うつ病、不安、睡眠障害、心的外傷後ストレス症状の有病率は、それぞれ 29%、26%、44%、48%であった。年齢および性別ごとのメタ分析の結果、年齢が低い子どもと比較して

思春期の子どもの方が、また男性と比較して女性の方が、うつ病および不安症の有病率が高いことが示された。本論文の報告によれば、コロナ禍における睡眠障害と心的外傷後ストレス症状が最も深刻であり、約半数の子どもがこれらの症状を経験したことが明らかになった。一方で、メタ分析に含まれた研究はすべて中国で実施されたものであり、本研究結果の一般化には限界がある点には注意が必要である。

続いて、Samji et al.（2022）は、新型コロナウイルス感染症の流行が 18 歳以下の子どものメンタルヘルスに与えた影響について、令和３（2021）年２月までに公開された 116 本の論文のレビューを行った。116 本の論文のうち、多くの研究がヨーロッパ圏で実施されていたものの、アジア、アメリカ、オーストラリア、アフリカなどさまざまな地域において実施された研究が含まれている。レビューの結果、子どもたちはコロナ禍前の報告よりも多くの抑うつ症状および不安症状を経験し、特に新型コロナウイルス感染症がかれらの生活に与える影響に対して高いレベルの恐怖と懸念をもっていることが明らかとなった。コロナ禍におけるメンタルヘルスの問題の悪化に関連する要因として、思春期の発達段階にあることや女性であることが挙げられた。また、自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如・多動症（ADHD）といった発達障害や強迫性障害（OCD）などの神経多様性（neurodiversity）をもつことや、がん、慢性呼吸器疾患などの慢性的な身体疾患があることがリスク要因として挙げられた。一方、メンタルヘルスの問題に対するレジリエンスとしてはたらく可能性のある要因としては、身体運動、娯楽へのアクセス、ポジティブな家族関係、ソーシャルサポートなどが挙げられた。全体として、多くの研究がコロナ禍における子どものメンタルヘルスの問題の増加を報告しており、短期的／長期的にもたらされるネガティブな影響を軽減するために、特にリスクの高い子どもには注意を払う必要性が指摘されている。

本節では、コロナ禍における子どもの学業成績ならびにメンタルヘルスについて、令和２年～令和３年前半に公刊された論文を扱った５本のレビュー論文の内容を概観した。新型コロナウイルス感染症の流行は、総じて子どもの学業成績やメンタルヘルスにネガティブな影響を及ぼしたことが報告されている。特に、学業成績については低年齢の子どもや家庭の SES の水準が低い子ども、メンタルヘルスについては思春期の子どもや女児、そして学業成績とメンタルヘルスの双方において障害をはじめとする特別な支援ニーズをもつ子どもにおけるネガティブな影響の強さが指摘されている。このようなリスクの高い子どもたちを含め、コロナ禍における子どもたちの学業面に対するサポートや、メンタルヘルスの問題の予防・軽減に向けたケアなどの重要性が示唆されたといえるだろう。

（３）日本の公的機関による調査研究

前節においては、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもの学業成績や子どものメンタルヘルスに与えた影響に関する海外のレビュー論文の知見を概観した。続いて、本節においては、コロナ禍における子どもの発達と適応について、日本の公的機関で実施されてきた調査研究の結果を論じていく。

１　内閣府「子供の生活状況調査」

はじめに、内閣府が実施した「令和２年度 子供の生活状況調査」の結果を取りまとめた

「令和３年 子供の生活状況調査の分析報告書」（内閣府政策統括官，2021）で報告された知見について見ていく。本調査は、「令和元年度 子供の貧困実態調査に関する研究」において策定された、自治体が子どもの貧困実態調査を実施する際に参考となる「共通調査項目案」を用いて、全国実態調査を試行的に実施するとともに、その結果の分析を行ったものである。全国の中学２年生およびその保護者 5000 組を対象に、調査票が配布された。本調査で測定された内容の中には、「新型コロナウイルス感染症の影響」について尋ねた項目が含まれている。当該項目では、保護者の状況と子どもの状況の双方を尋ねているものの、本章では主として「子どもの発達と適応」に焦点を当てていることから、新型コロナウイルス感染症の影響に関する「子どもの状況」についての項目の結果を整理する。

はじめに、学校の授業以外で勉強する時間については、「増えた」が 31.0%、「減った」が 10.7%、「変わらない」が 57.5%であり、等価世帯収入の水準別の集計結果や世帯の状況別の集計結果には有意な差が見られなかった。学校の授業がわからないと感じることについては、「増えた」が 26.4%、「減った」が 7.4%、「変わらない」が 65.5%であり、収入が低い家庭ならびにひとり親世帯において「増えた」の割合が高かった。地域のクラブ活動や学校の部活動で活動する回数は、「増えた」が 4.4%、「減った」が 68.9%、「変わらない」が 25.7%であり、収入が高い家庭ならびにふたり親世帯において「減った」の割合が高かった。食事を抜く回数は、「増えた」 が 5.5%、「減った」が 4.9%、「変わらない」が 88.8%であり、収入が低い家庭ならびにひとり親世帯において「増えた」の割合が高かった。夜遅くまで起きている回数は、「増えた」が 43.9%、「減った」が 4.5%、「変わらない」が 50.8%であり、ひとり親世帯において「増えた」の割合が高かった。親以外の大人や友達と話をすることは、「増えた」が 22.3%、「減った」が 22.1%、「変わらない」が 54.8%であり、収入が低い家庭において「増えた」の割合が高かった。イライラや不安を感じたり、気分が沈むことは、「増えた」が 28.8%、「減った」が 7.4%、「変わらない」が 63.1%であり、等価世帯収入の水準や世帯の状況による有意な差は見られなかった。以上のとおり、クラブ活動・部活動以外の項目については、コロナ禍前と「変わらない」と回答した子どもの割合が高かったものの、学習や生活習慣、コミュニケーションやメンタルヘルスなどにおいてコロナ禍前からの変化を経験している子どもも少なくはないことが明らかとなった。また、その変化については、家庭の収入や世帯の状況による差が見られることも示された。

新型コロナウイルス感染症の影響と子どもの現在の状況との関係について、注目すべき結果として、新型コロナウイルス感染症の拡大によって「学校の授業がわからないと感じること」が増えたことと、「現在の生活満足度」との間に関連が見られた点が挙げられる。すなわち、「学校の授業がわからないと感じること」の状況別に、子どもの生活満足度を集計したところ、生活満足度の平均値は、「学校の授業がわからないと感じること」が「増えた」群では 6.18、「減った」群では 7.20、「変わらない」群では 7.14 であった。 また、等価世帯収入の水準で分類した上で、「学校の授業がわからないと感じること」の状況別に子どもの生活満足度について集計したところ、等価世帯収入の水準がいずれの場合であっても、「学校の授業がわからないと感じること」が「増えた」と回答した群において、生活満足度の平均値が低いことが明らかとなった。家庭の収入の水準を問わず、コロナ禍において学校の授業がわからないことが増えた子どもたちは、現在の生活満足度が低い傾向にあることが示唆されたといえる。

２　国立成育医療研究センター「コロナ×こどもアンケート」

続いて、国立研究開発法人国立成育医療研究センターが７回にわたって実施した「コロナ×こどもアンケート」の結果を概観していく。

コロナ禍において、国立成育医療研究センター社会医学研究部・こころの診療部を中心とした研究者・医師有志は、「コロナ×こども本部」を結成した。その目的としては、「コロナ×こどもアンケート」調査を通して、コロナ禍の子どもと保護者の生活と健康の現状を明らかにすること、問題の早期発見や予防・対策に役立てること、そして子どもたちと保護者の安全・安心につながるような具体的な情報を発信することが挙げられている。「コロナ×こどもアンケート」のすべての調査回の報告書は、国立成育医療研究センターのホームページに掲載されている（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2020a，2020b，2020c，2021a，2021b，2021c，2022）。また、各報告書のダイジェスト版についても、併せてホームページ上に掲載されている。本節では、本調査で扱われた多岐にわたる内容の中でも、子どもの発達や適応に関して報告された知見の一部について整理していく。なお、本調査の対象者は、７歳～17 歳の子どもならびに０歳～17 歳の子どもをもつ保護者である。

令和２（2020）年４～５月の臨時休業と緊急事態宣言下において実施された第１回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2020a）では、子どもの生活リズムについて、コロナ前と比べて就寝時間や起床時間がずれた子どもや、テレビ・スマートフォン・ゲームなどを見ていた時間（スクリーンタイム）が増加した子どもが多いことが明らかとなった。また、子どもたち自身の困りごととしては、友だちと会えないこと、学校に行けないこと、外で遊べないこと、勉強が心配、体を動かして遊べないことなどが挙げられた。また、子どものメンタルヘルスに関しては、全体の 75%の子どもが何らかのストレス反応・症状を抱えており、例えば「最近集中できない」や「すぐにイライラしてしまう」の項目には約３～４割の子どもが該当していた。なお、保護者自身についても、６割以上が自分自身のストレス解消があまりできていないと回答していた。保護者のメンタルヘルスも、子どものメンタルヘルスに影響を与える重要な要因の一つであるため、軽視できない結果であると言える。

続いて、学校再開の時期にあたる令和２（2020）年６～７月に実施された第２回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2020b）では、メンタルヘルスに関して、全体の 72%の子どもが何らかのストレス反応・症状を示しており、「最近集中できない」や「すぐにイライラしてしまう」の項目にはそれぞれ約３割の子どもが該当していた。子どもと家族の関わりについて、自分自身が家族に共感してもらえると思っている子どもは、全体の６割弱に留まっていた。また、第１回調査に引き続き、保護者の６割以上が自分自身のストレス解消があまりできていないと回答した。

従来の夏休み明けの時期にあたる令和２（2020）年９～10 月に行われた第３回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2020c）では、生活リズムについて、コロナ禍前よりも就寝時刻が遅くなったり不規則になった子どもが、３歳～小学校低学年の 15%、小学校高学年以上の 32%にのぼることが示された。また、朝目覚めるのに時間がかかる子どもは４割以上、週末に平日よりも２時間以上長く寝ている子どもも約３割を占めていた。勉強以外でのスクリーンタイムの増加は約４割の子どもに見られ、小学生以下の 12%、中高生

の 25%は、１日の勉強以外でのスクリーンタイムが４時間にのぼっていた。一方、子どものメンタルヘルスに関しては、全体の 73%の子どもが何らかのストレス反応・症状を示しており、「最近集中できない」や「すぐにイライラしてしまう」の項目にはそれぞれ約３割の子どもが該当していた。３人に１人の子どもが、少なからず「学校に行きたくないことがある」ことが示された点も注目すべき結果であるだろう。

いわゆる「第３波」が到来した令和２（2020）年 11～12 月に実施された第４回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2021a）では、子どものメンタルヘルスについて、中等度以上のうつ症状が見られた子どもが、小学４～６年生では 15%、中学生では 24%、高校生では 30%にのぼっていた。軽度の症状まで含めると、その割合はさらに高いものとなる。保護者についても、約３割に中等度以上のうつ症状が見られた。子どもたちの悩みとしては、半数以上の子どもが「勉強のこと」を挙げており、友達関係、自分の心やきもち、体や健康のことについても３割以上の子どもが悩みとして挙げていた。一方、誰かに悩みについて話したり、気晴らしをしたりしてストレスを減らすことを「全くしていない」または「少し」と回答した子どもは約半数にのぼった。適切なストレス対処行動をとることができていない子どもが、決して少なくはないことが示唆された。また、コロナ禍前と比較した食生活について、約３割の子どもが間食の機会・量の増加を報告し、食事量の減少や不規則な食事時間、欠食を報告する子どもも少なからず見られた。

年度末の令和３（2021）年２～３月に実施された第５回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2021b）では、新型コロナウイルス感染症の流行開始から約１年が経過した時期においても、全体の 76%の子どもが何らかのストレス反応・症状を示しており、「最近集中できない」や「すぐにイライラしてしまう」に該当する子どもが３～４割を占めることが報告された。対人関係の変化について、家族で話す時間の増加／減少、親子の時間の捉え方（ちょうどよい、減らしたいなど）は家庭によってさまざまであったものの、約４分の１の子どもは、友達と話す時間が「とても減った」と感じていた。また、約半数の子どもは、コロナ禍において先生や大人に「話したり相談したりしづらくなった」と感じていることが明らかとなった。

令和３（2021）年９月に行われた第６回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター，2021c）においても、約３割弱の子どもが「最近集中できない」、「すぐにイライラしてしまう」といったストレス反応を示しており、全体の 70%の子どもが何らかの１つ以上のストレス反応に該当していた。少なからず「学校に行きたくないことがある」子どもの割合は前年度から減少しておらず 38%にのぼる点も、着目すべき結果であるだろう。コロナ禍において、子どもが運動をする機会についても減少傾向にあることが示唆された。

そして、令和３（2021）年 12 月に実施された第７回調査（国立研究開発法人国立成育医療研究センター， 2022）では、小学４年生以上の子どものうち、中等度以上のうつ症状が 16%（約６人に１人）に見られることが報告された。軽度のうつ症状を示した子どもも、25%にのぼった。小学１～３年生の子どもでも、約２割の子どもは「集中できない」に該当し、25%の子どもは「すぐにイライラしてしまう」に該当していた。メンタルヘルスに関連する何らかの問題を抱えている子どもの割合は、令和３（2021）年 12 月の時期においても決して少なくはないことが明らかとなった。

この「コロナ×子どもアンケート」は、主に SNS などを通した呼びかけによる任意参加の

オンライン調査であり、回答者の代表性については限界がある。しかしながら、のべ約４万人以上の子どもと保護者が参加し、コロナ禍における子どもと家族に関する多様な側面について測定した本調査の結果は、新型コロナウイルス感染症の流行が日本の子どもの発達や適応に与えた影響を把握する上で重要な知見であるだろう。

３　各自治体が独自に実施した調査

令和２年以降、新型コロナウイルス感染症の流行が人々の生活やメンタルヘルスに与えた影響について、独自の調査を実施した自治体も見られる。本項では、各自治体が独自に実施した調査の中で、子どもの発達や適応に関して得られた知見の一部を紹介したい。なお、本項では、主として各自治体が令和２年度に実施した調査の知見を概観していく。

学力については、令和２年に埼玉県が公立小・中・義務教育学校を対象に行ったコロナ禍における公立小・中学校等の学習状況に関する独自調査（埼玉県，2021）において、埼玉県学力・学習状況調査とのクロス分析を行っている。実施日の違いによる純粋な学習時間などの影響を取り除いた上で、令和元（2019）年度の学力調査結果データと比較した結果、令和２（2020）年度の小学校４、５年生の算数の学力が前年度より低下した可能性が示唆された。また、新型コロナウイルス感染症に関わる児童生徒の学習面への影響について、「実験・実習等が制限されることで、実感を伴った学習内容の定着が十分でないこと」ならびに「年度当初に考えていたより『主体的・対話的で深い学び」に取り組む機会が持てないこと」については、小学校・中学校のいずれにおいても約 75～80％の学校が該当していた。

子どもの生活の様子については、兵庫県教育委員会が令和２年９月に実施した小・中学校における新型コロナウイルス感染症の影響に関する調査（兵庫県教育委員会，2020c）では、学校の臨時休業中の基本的な生活習慣において、特に起床時刻が不規則になっていたことが示された。学校の臨時休業中に家庭内で子どもだけ（兄弟姉妹もしくは一人）で日中の生活していた児童生徒は、小学生の約２割、中学生の約３割を占めていた。また、令和２年 11～12 月に長野県松本市が小学校・中学校・高等学校の児童生徒に実施した調査（松本市，2021）によれば、学校の臨時休業の影響として、外出の減少、起床・就寝時間の変化、運動の減少などが挙げられた。一方で、家族との会話の増加や家族の手伝いをするようになったなど、家族との関わりの増加についても併せて報告された。多数ではないものの、「相談できる人がいなかった」「誰に相談したらよいかわからなかった」といった孤独感が心配される回答や、「親やきょうだいにたたかれた」「いつもお腹がすいていた」等の家庭環境が心配される回答も見られ、相談や支援体制の充実の必要性が指摘された。

子どもが抱える不安や悩みをはじめ、コロナ禍におけるメンタルヘルスに関する知見も報告されている。例えば、令和２年の臨時休業明けに、熊本県が小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒を対象に実施した調査（熊本県，2020）では、新型コロナウイルス感染症に関連して心配なこと、不安なこと、悩み（以下、不安や悩み等）がある児童生徒は、全体の 28.7%を占めていた。学校種別に見てみると、小学生では 32.2%であり、不安や悩み等の上位３項目は、新型コロナウイルス感染症のこと、体力のこと、学校行事のことであった。中学校では 30.6%であり、上位３項目は、学習のこと、体力のこと、新型コロナウイルス感染症のことであった。高等学校では 20.5%であり、上位３項目は、学習のこと、進路のこと、体力のことであった。特別支援学校では 17.8%であり、上位３項目は、新型コロナウ

イルス感染症のこと、体力のこと、生活習慣のことであった。また、徳島県（2020）では、令和２年 10 月に、徳島県内の公立学校（小６・中１・高１）の児童生徒および教職員を対象に、コロナ禍における児童生徒の心の状態に関する実態調査を実施した。令和２年４月から現在までの心の状態について、約 45%の児童生徒は、不安や悩み、ストレスが昨年度と比べて「かなり増えている」または「増えている」と回答した。調査時点で不安や悩み、ストレスがあると回答した約６割の児童生徒のうち、約４割が新型コロナウイルス感染症が影響している不安や悩み、ストレスが「ある」または「少しある」と回答した。具体的な内容については、該当する児童生徒の割合が多い順に、自分や家族に感染すること、学校行事のこと、文化・スポーツ（部活動を含む）のこと、学習・進路のこと、健康・体調のこと、であった。さらに、兵庫県では、令和２年度内に３回にわたって、新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケートを実施した（兵庫県教育委員会，2020a，2020b，2021）。「むしゃくしゃしたり、イライラしたり、かっとしたりすることがあるか」に対して、「ない」と回答する児童生徒の割合は、調査回を追うごとに増えたものの、第３回目調査においても約半数～６割に留まっていた。また、児童生徒の回答と保護者の回答との間には差が見られ、保護者が思っているよりも、「むしゃくしゃしたり、いらいらしたり、かっとしたりする」ことを経験している児童生徒の割合は、多いことが明らかとなった。「困ったことがあったとき、人に助けを求める」という項目についても、児童生徒の回答と保護者の回答との間には差が見られた。すなわち、困ったときに人に助けを求めない児童生徒の割合は、保護者が考えているよりも多いことが示された。愛知県岡崎市が令和３年１月に小・中学生を対象に実施した調査（岡崎市教育委員会，2021）では、学校の臨時休業中に新型コロナウイルス感染症以外のことで不安が「あった」または「少しあった」と回答した児童生徒は、小学１～３年生では 20%強、小学４～６年生では 25%強、中学生では 35%強にのぼった。すべての学年において、「思い通りに勉強できないことが多かった」「友達と一緒に話をしたり遊んだりできないことが多かった」「早寝・早起きがあまりできなかった」を挙げる子どもが多かった。また、一部の子どもにおいては、食事を十分にとれていなかったことや SNS に関する困りごとがあったことも明らかとなった。

本節では、コロナ禍における子どもの発達や適応について、公的機関が令和２年度（一部は令和３年度）に実施した調査研究の知見を概観した。測定内容は調査研究によって多様であったものの、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもの発達や適応のさまざまな面に影響を及ぼしたことが明らかとなっている。特に、生活面においては、睡眠や食の問題をはじめとする生活リズムの乱れ、スクリーンタイムの増加、運動機会の不足などが多くの調査研究において報告された。また、メンタルヘルスについては、学校の臨時休業期間や学校再開後において、子どもたちがさまざまな不安や悩み、ストレスや困りごとを抱えていた実態が明らかとなった。コロナ禍において、集中力の低下やイライラしたりかっとなったりすること、あるいはうつ症状をはじめとする精神医学的症状を示す子どもは決して少なくはない現状が示された。

（４）日本の民間企業・公益財団法人等による調査

前節においては、新型コロナウイルス感染症の流行と子どもの発達および適応、特に生活

の様子、悩みやストレスの実態、メンタルヘルスの問題等について、日本の公的機関による調査研究による知見を概観した。続いて、本節においては、日本の民間企業・公益財団法人等で実施されてきた調査研究の結果について論じていく。

１　ベネッセ教育総合研究所「中高生のコロナ禍の生活と学びに関する実態調査」

はじめに、ベネッセ教育総合研究所が東京大学社会科学研究所と共同で、「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの一環として令和２年に実施した「中高生のコロナ禍の生活と学びに関する実態調査」における報告（ベネッセ教育総合研究所，2022）を見ていきたい。本調査は、パネル調査の特徴である継続性を生かして、令和２年春の学校の臨時休業前後の中高生の意識や行動を多角的に明らかにしたものである。扱われている内容としては、生活、学習、保護者の役割、メンタルヘルス、進路選択などさまざまであるが、本項では、本章のテーマであるコロナ禍における子どもの発達と適応に関連する内容に焦点を当てる。

中高生の臨時休業期間中の生活時間についての報告（木村・朝永，2022）では、休業中の睡眠時間の増加、テレビ・DVD、テレビゲーム、携帯・スマートフォンなどに費やす時間の増加が示された。学習については、学習時間の増加分のほとんどが宿題の時間で、家庭学習の時間の増加は僅かであった。社会経済的背景（SES）の水準が低い家庭の子どもほど、臨時休業中の起床時間の遅れやメディアの使用時間の増加など、生活の乱れが生じやすいことも明らかとなった。なお、学校再開後はほとんどの時間が元に戻っていることを踏まえ、学校があることで生活時間の格差が縮小する可能性も示唆されている。

続いて、長期にわたる学校の一斉休業によって中高生が経験した喪失や困難、不安についての報告（大﨑，2022）を見てみると、多くの中高生が示した気持ちとして、友だちや仲間と過ごす時間が失われたことの残念さ、学校で友人と一緒に先生から学ぶことの大切さ、学校再開後の学習上の困難、進路選択への不安、感染再拡大への懸念などが挙げられる。このうち、友人や仲間と過ごす時間を失ったことの残念さは、女子の方が感じやすい傾向にあることが示された。また、成績の水準が低い生徒であるほど、学校の再開に対してネガティブになりやすく、学習上の困難や不安をより強く感じる傾向が示された。そして SES の水準が低い家庭の生徒ほど、感染拡大による経済状況の悪化に不安を感じていたことも明らかとなった。

また、コロナ禍における子どもの生活と学びについて、「格差」の観点から検討した報告（耳塚，2022）によれば、宿題、それ以外の家庭学習、学習塾での学習を合わせた総学習時間の SES による格差は、臨時休業期間中に大きく広がっており、十分に学習に取り組むことのできなった生徒が SES の水準が低い家庭に多かったことが示された。臨時休業期間中のパソコンやタブレット等の利用時間についても、家庭の SES によって差が見られた。SES の水準が高い家庭の生徒が、学習を目的としてパソコンやタブレットを活用したものと推測されたことから、デジタル・ディバイドの解消が課題として指摘されている。

なお、自由記述に関する分析では、コロナ禍の影響をポジティブに評価している生徒の様子も見受けられ、自分のペースで学習ができたことや趣味の時間が増加したことなどのプラスの影響があったこと、あるいは通学しなくて済むなどマイナスの影響が減ったことも報告されている（佐藤，2022）。なお、本調査における生徒自身、家庭の背景、学校や地域にかかわる変数等は、政府統計等と比較しても数ポイント以内のずれに留まるものが多く、

コロナ禍における中高生の実態をとらえる上で一定の信頼がおけるものであることが示されている（木村，2022）。

２　ベネッセ教育総合研究所「幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査」

ベネッセ教育総合研究所は、令和２年５月に、園や学校の臨時休業下における幼児および小学生の生活に関する調査を実施した。本項では、本調査の報告書（ベネッセ教育総合研究所，2020）に示されている結果のうち、小学生の生活や適応に関連する主な知見について見ていきたい。

生活面については、コロナ禍前と比べて平均睡眠時間が増加していることや、動画を見たりゲームをしたりといったデジタルメディアの使用時間が増加した児童が多いことが示された。コロナ禍以前と比べて、低学年の保護者の半数以上、高学年の保護者の６割以上が「生活習慣が乱れるようになった」ことを報告している。登校状況別に見てみると、通常登校の児童と比べて分散登校や休校の状況にある児童の方が、生活習慣の乱れが見られやすいことが示された。また、半数近い保護者は、「毎日勉強する習慣が乱れるようになった」ことを報告していたが、通常登校の児童と比べて分散登校や休校の状況下にある児童の方が、勉強の習慣の乱れも見られやすいことが示された。

学習時間については、コロナ禍前と比較すると臨時休業中の家庭での学習時間は増加していた。コロナ禍前の報告と本調査のいずれにおいても、学校での成績が良好な子どもほど、家庭での学習時間が長い傾向にあった。注目すべき点として、成績上位層ほど、平時よりも臨時休業中の方が、家庭での学習時間の増え幅が大きかった点が挙げられる（邵，2020）。

保護者から見た子どもの言動の変化については、低学年の保護者では６割以上、高学年の保護者でも半数以上が「楽しそうに過ごす様子が増えた」と回答し、低学年の保護者の半数以上、高学年の保護者でも半数弱が「成長を感じる様子が増えた」と回答していた。一方で、低学年の保護者の半数以上、高学年の保護者の半数弱が、「いら立っている様子」や「甘える様子」が増えたと回答していた。

なお、本調査では、子どもに関する内容に限らず、保護者の意識等についても尋ねており、例えば、子育てを通じた人とのつながりが多い母親や、配偶者・パートナーから心理的なサポートを受けていると感じる母親の方が、子育てに自信や楽しさを感じていることが報告されている。

３　日本財団・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社「コロナ禍が教育格差にもたらす影響調査」

公益財団法人日本財団と三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社は共同で、令和２年度末にあたる令和３年３月に、小学生から高校生の子どもがいる世帯の親を対象とした調査を実施した。令和２年春の臨時休業期間とその前後の学習状況等の変化について、世帯年収による比較も含めた検討を行っている。本項では、本調査の報告書（日本財団・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング，2021）に示されている知見の一部を見ていきたい。

はじめに、コロナ禍における勉強時間への影響については、いずれの世帯年収区分の家庭においても令和２年５月の総勉強時間が減少していたものの、高所得世帯（年収 800 万円

以上）は低所得世帯（年収 400 万円未満）に比べて、臨時休業期間中の勉強時間の減少幅が小さく、また臨時休業後も学校外の勉強を行っていた家庭の割合が高いことが示された。臨時休業期間中には、子どものスクリーンタイム（テレビやゲーム、インターネット等の使用時間）の増加も見られたが、その傾向は成績が低水準にある子どもや一人親世帯の子どもにおいてより強く示された。コロナ禍以前に生じていた格差は、コロナ禍において拡大する傾向にあったことが示唆される。

一方、子どもの非認知能力や生活習慣等の低下については、臨時休業期間が長い児童生徒における低下が著しく、例えば、臨時休業期間が２ヵ月以上と長期であった場合、友達と遊ぶ頻度の低下を約４割の子どもが示し、学校での生活や活動の充実の低下を約３割の子どもが示した。規則正しい起床・就寝、勉強に対する集中、精神的な安定についても、臨時休業期間が長期にわたった場合に、より顕著な低下を示した。また、小学生においては、学校行事が中止や縮小になった場合の非認知能力や生活習慣等へのネガティブな影響が大きく、特に運動会・体育祭・球技大会や修学旅行・移動教室が中止や縮小になった場合に、子どもの非認知能力や生活習慣等に対するネガティブな影響が見られた。

本節では、コロナ禍における子どもの発達や適応について、日本の民間企業や公益財団等が実施した調査研究の知見を概観した。前節で扱った公的機関による調査研究と同様に、測定内容は各調査によって差異が見られたものの、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもの発達や適応の多様な側面に影響を与えたことが明らかとなった。学習時間については、総学習時間は減少しながらも、家庭での学習時間は増加傾向にあることが示された。また、睡眠の問題やスクリーンタイムの増加といった生活面における変化や、子どもたちがコロナ禍で抱えている不安や懸念をはじめとするさまざまな感情の実態などが改めて確認されたといえる。コロナ禍における生活リズムの乱れや学習時間の減少などに、各家庭の SES の差が関連していた点も注目すべき知見であるだろう。コロナ禍における子どもの発達や適応に対して、コロナ禍以前からの格差が少なからず影響を及ぼした可能性が示唆された。

（５）日本の大学等の研究者による調査

前節においては、新型コロナウイルス感染症の流行と子どもの発達や適応について、日本の民間企業・公益財団法人等で実施されてきた調査研究による知見を概観した。続いて、本節においては、日本の大学等の研究者を中心に実施されてきた調査研究の結果について論じていく。

大阪府立大学山野則子研究室では、コロナ禍における子どもへの影響と支援方策について、保護者・子ども調査（保護者と子ども双方が参加：小学校高学年～高校生・高専生を対象、保護者のみが参加：０～19 歳未満の子どもをもつ保護者）ならびに機関（市町村の児童相談・母子相談部門、母子保健部門、教育委員会）を対象とした調査を実施した。このうち、本章のテーマであるコロナ禍における子どもの発達と適応に関して、主に子ども調査と保護者調査の報告書（山野則子研究室，2021）の内容を概観する。

保護者の視点から捉えた子どもの困りごとについて、半数の保護者が学業の遅れを心配しており、次いで生活リズムの乱れが４割弱、将来の進路の状況が３割弱であった。一方、保護者が捉える困りごとと子ども自身が感じている困りごととの間には、少なからずギャ

ップが見られたことも明らかとなっている。例えば、小学校高学年では、生活リズムの乱れや学業の遅れに関して、「子どもは困っていないが親は困っている」という傾向が多く見られた。中学生では、生活リズムの乱れや学業の遅れに加え、将来の入試や昼食などの食事の状況等に関しても「子どもは困っていないが親は困っている」という傾向が見られた。高校生では、生活リズムの乱れおよび昼食などの食事の状況等について、「子どもは困っていないが親は困っている」という傾向が見られた。一方、「家の大人の人が仕事に行っている間の居場所」については、小中高のいずれの発達段階においても、「親は困っていないが子どもは困っている」という傾向にあることも示された。

また、子どものストレスレベルについては、レベル０～レベル３（重いストレスレベル）のうち、レベル１（わずかなストレスレベル）を示す子どもの割合が最も高く、５割強を占めていた。保護者のメンタルヘルスとの関連も踏まえて見てみると、保護者のメンタルヘルスの問題が深刻な群であるほど、ストレスレベルが高い子どもが占める割合が多いことも報告されている。保護者のメンタルヘルスと子どものメンタルヘルスの関連を示唆する知見である。

長崎大学では、長崎県教育委員会の協力を得て、県下の公立小・中学校の教員を対象に、令和２年８～９月に調査（長崎大学アフターコロナ・ワーキング・グループ，2020）を実施した。臨時休業中から臨時休業明け直後の子どもたちの状況について、生活リズムが乱れた子どもや運動不足の子どもがいたことを多くの教職員が認識しており、いずれも７割近い割合を示していた。その他にも、学習や学力に不安を抱えている子どもや学校生活への意欲が低下している子ども、登校を苦痛に感じている子どもなど、臨時休業中から休業明け直後に子どもが抱えていた困難さは多様であったことが明らかとなった。また、自由記述においても、学校教育への支援・配慮として必要なこととして「子どもの育ちの保障とケア」のカテゴリーが見出され、またコロナ禍で困ったこと・危惧していることとして「子どもの不安・心身の変化・運動不足等への対応（特別な支援を要する児童生徒への対応を含む）」のカテゴリーが見出されたことからも、新型コロナウイルス感染症そのものに対する対策だけではなく、子どもの発達や適応の観点も含めた包括的な関する対応が学校現場で求められていることが確認されたといえる。

臨時休業をはじめとする新型コロナウイルス感染症の流行に伴う生活の変化が、日本の子どもたちにどのような影響を及ぼしたのかについて、これまでにいくつかの学術論文が公刊されてきた。本項では、本章のテーマである「コロナ禍における子どもの発達と適応」に関連する論文の中で、主として令和２年度に実施された研究の概要を図表 11－１に示す[2)]。調査対象者の発達段階としては、義務教育段階にある小中学生の子どもが含まれる研究を対象としてまとめた[3)]。

全体として、公的機関や民間企業および公益財団等の調査研究と類似する結果も多く見られた。すなわち、生活面に関しては、睡眠リズムの変化や食欲の変化といった健康に関する問題や、寝足りなさや頭痛、食欲のなさやだるさといった体調不良を抱えた子どもの多さが示されている（Horiuchi et al.，2020；斎藤他，2021）。また、睡眠や食習慣、スクリーンタイムの増加や運動の減少などの生活習慣の変化や生活リズムの乱れは、ストレス反応やメンタルヘルスの問題と関連を示すことも報告されている（Ishimoto et al.，2022；髙坂，2021）。さらに、共食の増加といった食事にまつわる習慣と子どもの主観的健康感との

関連も示されている（野田他，2022）。

メンタルヘルスの問題については、コロナ禍における情動機能へのネガティブな影響やストレス反応の高さが示されている（飯島他，2022；Ishimoto et al.，2022）。また、学校再開がいつになるかわからない不安や臨時休業中に登校したいという思いを抱えていた子どもの多さも報告されている（斎藤他，2021）。学校の臨時休業は、特に抑うつ・不安や無力感に強い影響を及ぼしたことも示されている（飯島他，2022）。休業中には、友達に会えなかったり思うように外出できなかったり、あるいは運動不足や学校での授業がないことなどに対して、子どもたちが困り感や寂しさ、不安などのさまざまな感情を抱えていた実態も報告されている（田村他，2022；渡部・戸部，2021）。一方、臨時休業中のストレス反応は全般的には低かったものの、高いストレスを示した子どもの特徴について検討した研究も見られる（高崎，2021）。令和２年度と比較して令和３年度の方が子どものストレス反応が強くなっていたことを示す知見を踏まえると（高崎，2022）、子どものメンタルヘルスの問題は臨時休業中の一時的なものとしてではなく、より長い期間にわたって捉えていく必要があるといえるだろう。令和元年度と比較した学級満足度については、子どもの発達段階によって差異があり、被侵害感が高くなった学年と低くなった学年が見られ、また学級生活不満足群の子どもが増えた学年と減った学年が見られた。学校生活における意欲やソーシャルスキルについても、発達段階によりさまざまな結果が報告されている（河村明和他，2022；河村茂雄他，2022；武蔵他，2022）。なお、保護者が子どもの運動発達や教育、心身の健康などに不安を感じている実態や、保護者のメンタルヘルスの問題が増加している現状も示されており（Horiuchi et al.，2020；亀田他，2022）、コロナ禍における子どもの発達と適応について考えていく上では、保護者や家族の様子にも目を向けることが必要であるだろう。

図表 11―１　コロナ禍における子どもの発達と適応に関する学術論文一覧

著者・出版年	調査時期	調査参加者[4]	主な結果
Horiuchi et al.（2020）	2020 年 4～5 月	3～14 歳の子どもの保護者 1200 名	対象児の 69.8%が何らかの健康に関する問題を抱えており、睡眠リズムの変化が最も多く、次いで食欲の変化が多く見られた。精神的苦痛（mental distress）を抱える保護者の割合は 2016 年の報告と比較して 2 倍以上であり、子どもの健康に関する問題は、保護者の精神的苦痛の程度に伴って増加を示した。
飯島他（2022）	2020 年 8 月	埼玉県内の公立中学校の 1～3 年生 221 名	通常時と比較して臨時休業時には有意に高いストレス反応が認められ、臨時休業は特に抑うつ・不安や無力感に対して強い影響を及ぼしたことが示された。また、臨時休業時に中学生に経験されたストレッサーは、「活動面」「交流面」「家

			庭面」「感染症」「学習面」の 5 つの側面から捉えられることが示され、各ストレッサーの経験によるストレス反応への影響性には個人による差異があることが明らかとなった。
Ishimoto et al.（2022）	2019 年 12 月 2020 年 3 月	8～12 歳の子ども 292 名	新型コロナウイルス感染症の流行は、子どもの中でも特に低年齢の男児の情動機能にネガティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。コロナ禍前の学校適応の高さは、情動機能の問題の低さに関連を示した。一人で過ごすこと、母親と過ごす時間が少ないこと、睡眠の調節がうまくいかないこと、運動不足、テレビゲームをする頻度が高いことは、情緒・行動の機能の低下と関連を示した。
亀田他（2022）	2021 年 1 月	岩手県、東京都、沖縄県の学童期の子どもをもつ保護者 319 名	緊急事態宣言時の外出自粛下において、東京都は他県と比較して、家庭における「心の問題」「家族内の人間関係」「知人との人間関係」の不安が高かった。子どもに関して不安を感じることとして、「運動発達」が全体で約 6 割と最も高く、「教育」も過半数を超え、「健康」が約 45%、「心の問題」は 4 割弱、「友人関係」は 3 割弱の保護者が不安を感じていた。子どもの「教育」に関する不安は、東京都と沖縄県で有意に高かった。
河村明和他（2022）	2019 年 9～11 月 2020 年 9～11 月	A 市の公立中学校の 1～3 年生 2019 年：1181 名 2020 年：1226 名	2019 年度と比較して 2020 年度は、学級満足度尺度の「被侵害」得点が全体として低かった。1 年生においては、2020 年度の「学級の雰囲気」についての意欲得点、ソーシャルスキルの「配慮のスキル」得点が有意に高かった。2020 年度の 2 年生においては、「学級生活不満足群」の出現率が有意に増加した。
河村茂雄他（2022）	2019 年 9～11 月 2020 年 9～11 月	A 市の公立小学校の 4～6 年生の児童 2019 年：1657 名 2020 年：1634 名	2019 年度と比較して 2020 年度は、児童のソーシャルスキルのうち「かかわりのスキル」得点が全体として有意に低かった。2020 年度の 4 年生は、学級満足度尺度の「承認感」得点、学校生活意欲

			尺度の「友達関係」「学習」「学級の雰囲気」についての意欲得点、「かかわりのスキル」得点が有意に低く、学級満足度尺度の「被侵害感」得点は有意に高かった。
髙坂（2021）	2020 年 3 月	小学生の保護者 510 名	小学生の生活習慣の変化とストレス反応との間には関連が見られた。主な結果として、「食習慣の乱れ」は、ストレス反応のすべての下位尺度（身体的症状、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力）との間に有意な正の相関を示した。また、「不規則な睡眠」「食習慣の乱れ」「学習時間の減少」「テレビ・ネット視聴の増加」「運動の減少」「ゲーム・スマホ利用の増加」といった生活習慣の変化が、無気力との間に有意な正の相関を示した。
武蔵他（2022）	2019 年 9～11 月 2020 年 9～11 月	A 市の公立小学校の 1～3 年生 2019 年：1757 名 2020 年：1867 名	2019 年度と比較して 2020 年度は、学級満足度尺度の「被侵害」得点が全体として低く、「学級生活不満足群」の出現率は減少したものの、「非承認群」の出現率は増加した。1 年生においては、2020 年度の「承認感」得点、「友達関係」ならびに「学級の雰囲気」についての意欲得点が有意に低かった。
野田他（2022）	2020 年 11 月	都内の区立小学校の 4～6 年生 141 名	新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけとして、共食（家族そろって食事をすること）が増加した群では、食事中の自発的コミュニケーションが多い児童の割合が高い傾向にあった。また、共食が増加した群では、食に関する意識への達成度が高い児童、主観的健康感が良好である児童の割合が高いことが示された。
斎藤他（2021）	2020 年 6 月	清瀬市立中学校の生徒 1688 名	学校再開がいつになるかわからない不安を感じた生徒は 46.5%、休校中に登校したいと思った生徒は 60.1%、休みが続いてほしいと思った生徒は 25.0%であった。休校中に何らかの体調不良があ

			った生徒は 55.8%であり、「寝足りなさ」が最も多い約 3 割を示し、頭痛、食欲のなさ、だるさについても一定の割合の生徒が当てはまっていた。
高崎（2021）	2020 年 5～6 月	熊本市の小学校 2 校の児童 782 名 熊本市の中学校 1 校の生徒 370 名	子どもたちの休校中のストレス反応は全般的には低かった。ストレスが高い子どもの特徴として、小学生では、学校の一方向型のオンライン授業が全くなく、学校の課題は 30 分～1 時間取り組み、塾の課題は全くせず、身体を動かすことを全くせず、本や漫画を週 1 回読み、ゲームや SNS は毎日していたという傾向が見られた。中学校では、学校の一方向型のオンライン授業を週 2,3 回受け、身体を動かすことを全くせず、毎日 SNS をしていたという傾向が見られた。
高崎（2022）	2021 年 6 月	熊本市内の中学校の生徒 451 名 ※一部の分析は、高崎（2021）と比較	ICT を活用した学習について、ICT 活用の「授業参加のしやすさ」と「学習のおもしろさ」の高さが、生徒の自宅でのタブレットを活用した学習の頻度の高さと関連することが示された。また、悩みを相談できる大人が家にいることで、ストレスが緩和される可能性が示唆された。2020 年度の調査と比較して、ICT を活用した学習への肯定的な評価は高まっていたものの、生徒のストレス反応は 2021 年度の方が強くなっていた。
田村他（2022）	2020 年 5 月 2020 年 6～7 月	1 都 3 県の公立小中学校 31 校に在籍する児童生徒と保護者 休校中：2423 組、休校後：1341 組	休校中の子どもの困りごとの上位 3 項目は、「友だちに会えない」「思うように外出できない」「運動不足」であった。一方、親の心配ごとの上位 3 項目は、「勉強を教えてもらえない」「思うように外出できない」「運動不足」であった。休校明けの子どもの困りごとは、休校中と比較できる全項目において減少したものの、休校明けの調査で新設した「マスク着用」や「学校行事がないこと」に対する訴えが高値を示していた。

渡部・戸部（2021）	2020 年 3 月 2020 年 5 月	都内の区立中学校の中学生 第 1 回：212 名 第 2 回：310 名	臨時休校措置に対する思いについて、第 1 回では「友達と会えなくてさみしい」が 67%と最も高く、「学校がなくてつまらない」「授業がなくて勉強のことが不安だ」についても過半数の生徒が該当した。第 2 回では「友達と会えなくてさみしい」の回答が約 70%にまで増加し、「授業がなくて勉強のことが不安だ」についても約 70%にまで増加した。学校再開に対しては、全体の 3～4 割の生徒が不安を感じており、2,3 年生に共通して授業に関する不安が見られ、3 年生では受験（進路）への不安が高い割合で示された。

（６）おわりに

本章では、新型コロナウイルス感染症の流行、そして流行の拡大に伴う生活の変化が子どもに与えた影響について、「コロナ禍における子どもの発達と適応」のテーマの下、多岐にわたる調査研究により得られた知見を紹介してきた。なお、いずれの調査研究についても、コロナ禍前後での厳密な比較研究であるとは言い難く、子どもの発達や適応に関して報告された知見のすべてが、新型コロナウイルス感染症の影響のみによってもたらされたとは結論づけられない点には留意が必要である。しかしながら、学校の臨時休業をはじめ、コロナ禍という前例のない予期せぬ事態が子どもの発達や適応に与えた影響は、決して小さなものではなかったといえるだろう。コロナ禍における生活様式の変化や活動の制限は、子どもの生活面や学習面、対人関係面、そして心身の健康面といった多様な側面に対して、さまざまな困難や問題をもたらしたことが改めて確認された。一方で、コロナ禍における変化や制限のすべてが、子どもの発達や適応にネガティブな影響のみをもたらしたわけではない。ICT を活用した学習の充実化をはじめ、ポジティブな影響として捉えられる事態も少なからず見られる。本章では、主としてコロナ禍における子どもの発達や適応に関するネガティブな影響に焦点を当てたが、ポジティブな効果も含めて、多角的な視点からの知見が獲得されていくことが重要であるだろう。また、本章で概観した調査研究の多くは令和２年度あるいは令和３年度に実施されたものであったが、令和５年現在、コロナ禍における子どもの発達や適応に関しては、さらに多くの調査研究の結果が報告されている。今後もさらなる知見が蓄積され、新型コロナウイルス感染症に限らず、この先に訪れるかもしれない未曽有の事態下における子どもの発達や適応に関する適切なケアやサポートへと活用されることが期待される。

＜注＞

1）新型コロナウイルス感染症の流行に伴う学校等の一斉臨時休業（school closure）については、本章で扱う各調査研究によってさまざまな表記が用いられているが、本章において

は、報告書全体の表記と統一し、原則として「臨時休業」と記す。
2）原則として令和２（2020）年度に測定されたデータを含む学術論文を表中にまとめたが、令和２（2020）年度のデータとの比較が行われている研究など、一部令和３（2021）年度に測定されたデータによる学術論文も含まれている。
3）各研究において実施された質問紙調査への回答者については、児童生徒本人の評定による調査と保護者の評定による調査の双方が含まれている。
4）図表 11―１の「調査対象者」の人数については、論文の本文中に有効回答者数や分析対象者数が示されていた場合には、有効回答者数または分析対象者数を表中に示している。

（参考文献）
ベネッセ教育総合研究所，2020，『幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査―2020 年 5 月実施―』
ベネッセ教育総合研究所，2022，『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』
Hammerstein, S., König, C., Dreisörner, T., & Frey, A., 2021, “Effects of COVID-19-related school closures on student achievement: A systematic review”, *Frontiers in Psychology*, 12, doi: 10.3389/fpsyg.2021.746289
Horiuchi, S., Shinohara, R., Otawa, S., Akiyama, Y., Ooka, T., Kojima, R., ... & Yamagata, Z., 2021, “Correction: Caregivers’ mental distress and child health during the COVID-19 outbreak in Japan”, *Plos One*, 16, doi: 10.1371/journal.pone.0243702
兵庫県教育委員会，2020a，『新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケート第１回調査結果』
兵庫県教育委員会，2020b，『新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケート第２回調査結果』
兵庫県教育委員会，2020c，『小・中学校における新型コロナウイルス感染症の影響に関する調査結果』
兵庫県教育委員会，2021，『新型コロナウイルス感染症の影響に関する心のケアアンケート第３回調査結果』
飯島有哉・松本茂美・桂川泰典，2022，「感染症拡大下における臨時休校が中学生のストレスにおよぼす影響性とストレス反応表出プロセスに関する記述的検討」『学校メンタルヘルス』，25，doi: 10.24503/jasmh.25.2_1_12
Ishimoto, Y., Yamane, T., Matsumoto, Y., Takizawa, Y., & Kobayashi, K., 2022, “The impact of gender differences, school adjustment, social interactions, and social activities on emotional and behavioral reactions to the COVID-19 pandemic among Japanese school children”, *SSM-Mental Health*, 2, doi: 10.1016/j.ssmmh.2022.100077
亀田佐知子・井戸ゆかり・園田巌・横山草介・早坂信哉，2022，「新型コロナウイルス感染症拡大における学童期の子どもをもつ家庭の現状と課題」『日本健康開発雑誌』，43，pp.13-25.
河村明和・武蔵由佳・河村茂雄，2022，「コロナ禍における中学生の学級生活満足感と意欲

とソーシャルスキルの検討―2019 年度と 2020 年度との比較を通して―」『学級経営心理学研究』, 11, pp. 11-18.
河村茂雄・武蔵由佳・河村明和, 2022, 「コロナ禍の 2020 年度の高学年児童の学級生活満足感と意欲とソーシャルスキル―2019 年度と 2020 年度との比較を通して―」『学級経営心理学研究』, 11, pp. 1-10.
木村治生, 2022, 「第 1 章 コロナ禍が中高生に与えた影響を明らかにする―調査の目的と概要―」 ベネッセ教育総合研究所, 『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』, pp. 17-28.
木村治生・朝永昌孝, 2022, 「第 2 章 中高生の休校中の生活時間―休校になると生活はどう変わるのか―」 ベネッセ教育総合研究所, 『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』, pp. 17-28.
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2020a, 『コロナ×こどもアンケート第 1 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2020b, 『コロナ×こどもアンケート第 2 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2020c, 『コロナ×こどもアンケート第 3 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2021a, 『コロナ×こどもアンケート第 4 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2021b, 『コロナ×こどもアンケート第 5 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2021c, 『コロナ×こどもアンケート第 6 回調査報告書』
国立研究開発法人国立成育医療研究センター, 2022, 『コロナ×こどもアンケート第 7 回調査報告書』
髙坂康雅, 2021, 「親の認知した臨時休業中の小学生の生活習慣の変化とストレス反応との関連」『心理学研究』, 92, pp. 408-416.
熊本県, 2020, 『新型コロナウイルス感染症に係る不安や悩み等の調査結果について』
Ma, L., Mazidi, M., Li, K., Li, Y., Chen, S., Kirwan, R., ... & Wang, Y., 2021, “Prevalence of mental health problems among children and adolescents during the COVID-19 pandemic: A systematic review and meta-analysis” *Journal of Affective Disorders*, 293, pp. 78-89.
松本市, 2021, 『新型コロナウイルス感染症についてのアンケート調査結果報告書』
耳塚寛明, 2022, 「第 10 章 コロナ禍は子どもの生活と学びになにをもたらしたのか」 ベネッセ教育総合研究所, 『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』, pp. 131-137.
武蔵由佳・河村明和・河村茂雄, 2022, 「コロナ禍における 2020 年度の学級生活満足感と意欲の検討―小学校低学年の児童に注目して―」『学級経営心理学研究』, 11, pp. 19-26.
内閣府政策統括官, 2021, 『令和 3 年子供の生活状況調査の分析報告書』
長崎大学アフターコロナ・ワーキング・グループ, 2020, 『新型コロナウイルス流行によ

る学校教育への影響に関する調査報告書―長崎県学校教職員へのアンケート調査分析―』
Nearchou, F., Flinn, C., Niland, R., Subramaniam, S. S., & Hennessy, E., 2020, “Exploring the impact of COVID-19 on mental health outcomes in children and adolescents: a systematic review”, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17, doi: 10.3390/ijerph17228479
日本財団・三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2021, 『コロナ禍が教育格差にもたらす影響調査【詳細資料集】』
野田聖子・中岡加奈絵・奥裕乃・山田麻子・田辺里枝子・齋藤充加・五関（曽根）正江, 2022, 「小学校4～6年生の児童におけるコロナ禍での食習慣・生活習慣の実態」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』, 28, pp.99-106.
岡崎市教育委員会, 2021, 『令和２年度新型コロナウイルス感染症による「子供への影響実態調査」報告書』
大﨑裕子, 2022, 「第6章 長期休校後の中高生の心境―喪失、困難、不安にみる新型コロナウイルス感染拡大の影響―」 ベネッセ教育総合研究所, 『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』, pp.71-81.
Panagouli, E., Stavridou, A., Savvidi, C., Kourti, A., Psaltopoulou, T., Sergentanis, T. N., & Tsitsika, A., 2021, “School performance among children and adolescents during COVID-19 pandemic: A systematic review”, *Children*, 8, doi: 10.3390/children8121134
埼玉県, 2021, 『コロナ禍における公立小・中学校等の学習状況に関する独自調査の結果と今後の取組について』
斎藤雄弥・犬丸淑樹・中村春野・大森希望・徐アレキサンダー・林泰志・一瀬真美・本間丈博・赤星祥伍・仁科範子・大澤由記子・坂田篤・小保内俊雅, 2021, 「コロナウイルス感染症 2019 に伴う長期休校がもたらした中学生への影響」『日本小児科学会雑誌』, 125, pp.949-956.
Samji, H., Wu, J., Ladak, A., Vossen, C., Stewart, E., Dove, N., ... & Snell, G., 2022, “Mental health impacts of the COVID-19 pandemic on children and youth-a systematic review”, *Child and Adolescent Mental Health*, 27, 173-189.
佐藤昭宏, 2022, 「第8章 コロナ禍を中高生はどのように受けとめたのか―自由記述の回答に着目して―」 ベネッセ教育総合研究所, 『コロナ禍における学びの実態―中学生 ・ 高校生の調査にみる休校の影響―』, pp.97-108.
邵勤風, 2020, 「臨時休業中の親子の実態と保護者の意識」『VIEW21教育委員会版』, 1, pp.11-13.
高崎文子, 2021, 「新型コロナウイルス感染症による長期休校中の児童・生徒の家庭での過ごし方に関する調査」『熊本大学教育実践研究』, *38*, 27-35.
高崎文子, 2022, 「コロナ禍における中学生の学校生活に関する調査」『熊本大学教育実践研究』, 39, pp.39-46.
田村史江・今井夏子・田中良・鹿野晶子・吉永真理・野井真吾, 2022, 「COVID-19パンデミックによる長期休校中と休校明けの子どもの困りごとと保護者の心配ごとの実態」『日本幼少児健康教育学会誌』, 7, pp.83-96.

徳島県，2020，『コロナ禍における児童生徒の心の状態に関する実態調査について』
渡部千晶・戸部秀之，2021，「新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校措置と中学生の意識」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』，19，pp. 57-63.
山野則子研究室，2021，『令和２年度厚生労働行政推進調査事業（厚生労働科学特別研究事業）コロナ禍における子どもへの影響と支援方策のための横断的研究 保護者調査・子ども調査報告書』

第 12 章　コロナ禍と家族の貧困：「子どもの生活実態調査」に見るコロナ禍の影響

三宅雄大

１．はじめに

本研究事業では、家庭の社会経済的背景（Socio-Economic Status）が子どもの学力に大きな影響を与えるという知見を踏まえつつも、①SES が低い層において、なおかつ、②新型コロナウイルス感染症拡大（以下、コロナ禍）の影響を受けてもなお、学力面で成果をあげている児童生徒（resilient students）に着目し、それを可能にする条件（児童生徒・家庭の状況等、学校・教育委員会等の取組み）を明らかにすることを目指している。

ところで、SES の低さは、貧困（poverty）問題と連続線上にあると言えよう。ここで貧困とは、「容認できない困窮（unacceptable hardship）」という「物質的核」を軸としながら、「関係的・象徴的側面」での困難（軽視、スティグマ、人権の否定等）を含む状況を指すものとする（Lister, 2022）。以上の整理を踏まえると、本研究事業の着目する SES の低い層には、そのコアの部分に貧困世帯を含むものと考えられる。

そうであるとすれば、SES の低い層のなかでも最も困難な状況にあると想定される貧困状況で生活する家族（保護者、子ども）に着目し、同時にコロナ禍がかれらの生活にどのような影響を及ぼしたかを把握することは、本研究事業の目的に対しても一定の意義があるだろう。そこで本稿では、コロナ禍と家族の貧困（有子世帯の貧困）に関する先行研究をレビューすることで、コロナ禍が貧困世帯の保護者と子どもに及ぼした影響、その実態の把握を試みる。

２．研究方法

本稿は、既に言及したとおり先行研究をレビューすることを通じて、コロナ禍が貧困世帯の保護者と子どもに及ぼした影響を明らかにしようとするものである。ただし、コロナ禍と家族の貧困に関する先行研究は、実践・現場報告（赤石／湯澤 2020；渡辺 2020 等）が中心となっており、体系的な調査研究は限られている（阿部 2021；中囿 2021；葛西 2021）。

そこで本稿では、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（平成 25 年６月成立、平成 26 年１月施行）及び「子供の貧困対策に関する大綱」（平成 26 年決定、令和元年改訂）の枠組み[1]のもと実施された地方公共団体による「子どもの生活実態調査」を対象とし、これらの調査結果を整理することを通じてコロナ禍が家族の貧困に及ぼした影響を検討する。

---

[1] 「子どもの貧困対策の推進に関する法律」の第 14 条では、「国及び地方公共団体は、子どもの貧困対策を適正に策定し、及び実施するため、子どもの貧困に関する指標に関する研究その他の子どもの貧困に関する調査及び研究その他の必要な施策を講ずるものとする」（傍線引用者）と規定されている。また、「子供の貧困対策に関する大綱」においては、国が地方公共団体の実施する子どもの貧困に関する実態調査を支援すること（データの提供、調査項目の共通化等）が示されている。

具体的なレビュー対象の抽出には、東京都立大学の子ども・若者貧困研究センターの作成した「子どもの生活実態調査」の一覧表を利用する[2]。子ども・若者貧困研究センターの「子どもの生活実態調査」一覧表には、地方公共団体（32 都道府県、314 市区町村）が令和４（2022）年８月現在までに実施した調査に関して「都道府県名」、「市区町村名」、「調査年」、「調査名」、報告書等への「リンク」がまとめられている。

本稿では、当該一覧表に掲載されている「子どもの生活実態調査」のうち、以下の条件すべてに該当するものを抽出している：すなわち、①調査実施時期が令和２（2020）年１月～令和４（2022）年 12 月末日までであること（コロナ禍と重複する時期に調査を実施していること）、②小学生又は中学生の保護者、あるいは、小学生又は中学生本人を調査対象に含むこと、③コロナ禍の影響に関わる調査項目が設定されていること、以上である[3]。ただし、上記の条件に該当する場合であっても、調査結果において経済的状況による比較（貧困世帯：非貧困世帯の比較）がなされていない場合には、レビュー対象から除外している。

図表 12-１．レビュー対象の調査一覧

地域			調査名	調査時期
北海道・東北	山形県	米沢市	米沢市子どもの生活に関するアンケート調査	2021年11月4日-11月19日
関東	千葉県	佐倉市	佐倉市子どもの生活状況調査	2022年1月11日-31日
	東京都	文京区	文京区子どもの生活状況調査	2021年9月10日-10月5日
			文京区事業利用者調査	2021年10月22日-11月15日
	東京都	大田区	大田区子どもの生活実態調査	2020年9月16日-10月16日
			大田区ひとり親家庭の生活実態に関する調査	2020年9月4日-25日
	東京都	日野市	日野市子どもの生活実態調査	2021年2月18日-3月1日
	神奈川県	横浜市	横浜市子どもの生活実態調査	2020年12月17日-2021年1月8日
中部	福井県		福井県子どもの生活状況調査	2021年1月6日-1月27日
	長野県	長野市	長野市子どもの生活状況に関する実態調査	2021年10月18日-11月3日
近畿	三重県	四日市市	四日市市子どもの生活実態調査	2021年10月-11月
	兵庫県	神戸市	神戸市子どもの生活状況に関する実態調査	2021年9月1日-17日
	和歌山県	新宮市	新宮市子どもの生活実態調査	2021年10月18日-29日
九州・沖縄	福岡県	福岡市	福岡市子どもの生活状況等に関する調査	2021年10月-11月
	佐賀県		佐賀県子どもの生活実態調査	2020年7月17日-8月21日
	佐賀県	武雄市	武雄市子どもの生活実態調査	2020年12月-2021年1月
	長崎県	長崎市	長崎市子どもの生活に関する実態調査	2021年11月15日-30日
	沖縄県		沖縄子ども調査	2021年10月8日-25日

（１）レビュー対象の概要

以上により抽出された 18 の調査は、図表 12-１のとおり 16 の地方公共団体によって実施されている。レビュー対象となる調査の実施主体は、市又は区が 13、都道府県が３で、町村は含まれていない。また、関東（5/16）と九州・沖縄（5/16）で実施された調査の占める

[2] 東京都立大学・子ども・若者貧困研究センター『子どもの生活実態調査』（https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/survey-of-children-living-conditions/）（2023/1/31 閲覧）

[3] なお、「リンク不明」により報告書データにアクセス不可能であった調査は、対象から除外している。

割合が高く、そもそも、中国・四国の地方公共団体が実施した調査は含まれていない。この意味で、本稿のレビュー対象には、地域的な偏りがある。

図表 12-２.各調査の調査対象者概要

調査名	調査対象	配布件数	回収数（率）	方法
米沢市子どもの生活に関するアンケート調査	市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者	672　672 689　689	473(70.4)　473(70.4) 434(63.0)　409(59.4)	学校配布・回収 又は郵送回収
佐倉市子どもの生活状況調査	市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者	1360　1360 1445　1445	1328(97.6)　978(71.9) 1353(93.7)　866(60.0)	学校配布・回収 郵送配布・回収 電子申請システム
文京区子どもの生活状況調査	未就学児の保護者　小学生の保護者 中学生の保護者　高校生世代の保護者 中学生　高校生	1500　1500 900　900 900　900	628(41.9)　594(39.6) 311(34.6)　310(34.4) 218(24.2)　216(24.0)	無作為抽出 郵送配布・Web回収
文京区事業利用者調査	児童扶養手当受給者 就学援助受給保護者　同左中学生	490 635　353	72(14.7) 219(34.5)　71(20.1)	郵送配布・Web回収
大田区子どもの生活実態調査	区立小学5年生　その保護者	4853　4853	4203(86.6)　4197(86.5)	学校配布・回収
大田区ひとり親家庭の生活実態に関する調査	児童育成手当受給世帯	2000	877(43.9)	無作為抽出 郵送配布・回収
日野市子どもの生活実態調査	市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者 市内在住の16～17歳　その保護者	1587　1587 1636　1636 1701　1701	1276(80.4)　1238(78.0) 1100(67.2)　1125(68.8) 499(29.3)　506(29.8)	学校配布・回収 ＊郵送配布・回収 LINE回収併用
横浜市子どもの生活実態調査	市内在住の5歳児の保護者 市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者	4000 4000　4000 4000　4000	2608(65.2) 2214(55.4)　2278(57.0) 2006(50.2)　2091(52.3)	無作為抽出 郵送配布・回収
福井県子どもの生活状況調査	小学5年生　その保護者 中学2年生　その保護者	2000 2000	1366(68.3) 1318(65.9)	郵送配布・回収
長野市子どもの生活状況に関する実態調査	市内在住の4～5歳の保護者 市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者 市内在住の16～17歳　その保護者	1200 1200　1200 1200　1200 1200　1200	749(62.4) 475(39.6)　460(38.3) 405(33.8)　394(32.8) 363(30.3)　357(29.8)	郵送配布・回収
四日市市子どもの生活実態調査	市立小学5年生　その保護者 市立中学2年生　その保護者	5356 5080	5184(96.8) 4802(94.5)	学校配布・回収
神戸市子どもの生活状況に関する実態調査	市立小学5年生　その保護者 市立中学2年生　その保護者	12832　12832 11368　11368	10862(84.6)　10800(84.2) 9324(82.0)　9255(81.4)	学校配布・回収
新宮市子どもの生活実態調査	市内在住の小学5年生　その保護者 市内在住の中学2年生　その保護者	— —	188(90.0)　同左 169(73.8)　同左	学校配布・回収
福岡市子どもの生活状況等に関する調査	市立小学6年生の保護者 市立中学3年生の保護者	13914 12405	5652(40.6) 4333(34.9)	学校配布 Web回収
佐賀県子どもの生活実態調査	県内在住の小学2年生　その保護者 県内在住の小学5年生　その保護者 県内在住の中学2年生　その保護者 県内在住の高校2年生　その保護者	1513 1513 1509 1500	938(62.0) 912(60.3) 847(56.1) 819(54.6)	無作為抽出 学校配布 郵送回収
武雄市子どもの生活実態調査	小学1年生の保護者 小学5年生　その保護者 中学2年生　その保護者 16～17歳　その保護者	413 470　470 435　435 499　499	387(93.7) 462(98.3)　449(95.5) 395(90.8)　375(86.2) 188(37.5)　197(39.5)	学校配布・回収 ＊16～17歳⇒郵送配布・回収
長崎市子どもの生活に関する実態調査	市立小学5年生　その保護者 市立中学2年生　その保護者	1583　1583 1500　1500	1501(94.8)　1506(95.1) 1324(88.3)　1319(87.9)	学校配布・回収 Web回答併用
沖縄子ども調査	小学5年生　その保護者 中学2年生　その保護者 0～17歳の保護者	3331 3317 13500	2387(71.7)　2386(71.6) 2494(75.2)　2496(75.3) 4568(33.8)	学校配布・回収 ＊0～17歳：無作為抽出 ⇒郵送調査

各調査の調査対象は、小学５年生とその保護者、ならびに、中学２年生とその保護者が中心となっており、一部調査でその他の学校段階や学年を含んでいる（図表 12-２）。そのため、一部の調査（文京区、長野市、武雄市、沖縄県）では、その調査結果に未就学児童や高校生相当の子どもの世帯の実態を含む場合があることに留意が必要である。

また、各調査における回答の回収率には、20%台から 90%台までばらつきがある。なお、先行研究（梶原・近藤・栗原 2021）の知見同様、調査方法が学校配布・回収の場合、郵送配布・回収や Web 回収の場合に比して回収率が高い傾向にある。

レビュー対象の調査で用いられている貧困の測定基準は、大別して４つに整理できる（図

表 12-３参照)。第一に、等価可処分所得の中央値の 1/2（50%）を貧困線として、①中央値以上、②中央値の 1/2 以上～中央値未満、③中央値の 1/2 未満に切り分ける「類型Ⅰ」(7/18 件該当)。第二に、上記同様の貧困線を設定し、①中央値の 1/2 以上と、②中央値の 1/2 未満に切り分ける「類型Ⅱ」(3/18 件該当)。第三に、世帯所得（等価可処分所得の中央値の 1/2 未満)、家庭での剥奪（過去 1 年間に買えなかった／払えなかった経験のある項目に該当)、子どもの経験の剥奪（経済的な理由で与えられなかった項目に該当）から複合的に把握する「類型Ⅲ」(4/18 件該当)。最後に、以上のいずれにも該当しない「その他」(4/18 件該当)。以上を踏まえると、各調査で取り扱われている家族の貧困は、世帯所得に基づく経済的困窮を中核に据えていると考えられる一方で、必ずしも厳密な対応関係にはないと考えられる。

図表 12-３．各調査の貧困基準

調査名	貧困の測定基準	
米沢市子どもの生活に関するアンケート調査	等価可処分所得：中央値の1/2以上＝B世帯　中央値の1/2未満＝A世帯	類型Ⅱ
佐倉市子どもの生活状況調査	等価可処分所得：中央値以上　中央値の1/2以上中央値未満　中央値の1/2未満	類型Ⅰ
文京区子どもの生活状況調査	生活状況調査と事業利用者調査の比較（児童扶養手当、就学援助の受給）	その他
文京区事業利用者調査		
大田区子どもの生活実態調査	世帯収入　家庭での剥奪　子どもの経験等の剥奪：いずれかに該当＝生活困難層	類型Ⅲ
大田区ひとり親家庭の生活実態に関する調査	生活実態調査とひとり親家庭調査の比較（児童育成手当の受給）	その他
日野市子どもの生活実態調査	世帯収入　家庭での剥奪　子どもの経験等の剥奪：上記の2項目以上該当＝困窮層　1項目該当＝周辺層	類型Ⅲ
横浜市子どもの生活実態調査	等価可処分所得：中央値以上＝所得区分3　中央値の1/2以上中央値未満＝所得区分2　中央値の1/2未満＝所得区分1	類型Ⅰ
福井県子どもの生活状況調査	等価世帯収入：中央値以上　中央値の1/2以上中央値未満　中央値の1/2未満	類型Ⅰ
長野市子どもの生活状況に関する実態調査	世帯収入　家庭での剥奪　子どもの経験等の剥奪：上記の2項目以上該当＝困窮　1項目該当＝周辺　非該当＝一般	類型Ⅲ
四日市市子どもの生活実態調査	等価世帯収入：中央値以上＝所得区分1　中央値の1/2以上中央値未満＝所得区分2　中央値の1/2未満＝所得区分3	類型Ⅰ
神戸市子どもの生活状況に関する実態調査	等価世帯収入：中央値以上　中央値の1/2以上中央値未満＝困窮度2　中央値の1/2未満＝困窮度1	類型Ⅰ
新宮市子どもの生活実態調査	等価可処分所得：中央値以上＝所得段階Ⅰ　中央値の1/2以上中央値未満＝所得段階Ⅱ　中央値の1/2未満＝所得段階Ⅲ	類型Ⅰ
福岡市子どもの生活状況等に関する調査	世帯収入（生活保護基準を参考）：600万円以上　300万～600万円　300万円未満	その他
佐賀県子どもの生活実態調査	等価世帯収入：中央値の2/1以上＝非低所得世帯　中央値の1/2未満＝低所得世帯	類型Ⅱ
武雄市子どもの生活実態調査	世帯収入　家庭での剥奪　子どもの経験等の剥奪：上記いずれかに該当＝困難度が高い世帯　非該当＝それ以外の世帯	類型Ⅲ
長崎市子どもの生活に関する実態調査	等価世帯収入：中央値の2/1以上＝Ⅰ層　中央値の1/2未満＝Ⅱ層	類型Ⅱ
沖縄子ども調査	等価可処分所得：中央値以上＝一般層　中央値の1/2以上中央値未満＝低所得層Ⅱ　中央値の1/2未満＝低所得層Ⅰ	類型Ⅰ

本稿では、以上に整理した貧困の測定基準（「類型Ⅰ～Ⅲ」と「その他」）を踏まえつつ、便宜的に「貧困世帯」と「非貧困世帯」に２分して、各調査の結果を比較している。ただし、測定基準によって、対象が３分割されている場合（例えば、「類型Ⅰ」のように、①等価可処分所得の中央値以上、②中央値の 1/2 以上～中央値未満、③中央値の 1/2 未満に分類されている場合）には、後２者を「貧困世帯」（③＝貧困Ⅰ・②＝貧困Ⅱ）として、特に困窮度の高いと考えられる「貧困Ⅰ」と非貧困世帯を比較分析している。

なお、以上の分析を行う際には、各調査に関する資料（調査報告書等）に示されているデータ（数値）を用いることになるが、各資料から具体的な数値が読み取れない場合（例えば、割合が極めて小さくグラフで省略されている場合、集計表などが記載されていない場合）には、その数字は「-」として表記し分析から除外している。

具体的なレビューの手順としては、まず、①対象となるそれぞれの「子どもの生活実態調査」に関して、コロナ禍と関連する調査項目を分類しカテゴリを生成する。ただし、カテゴリ生成に際しては、調査項目を細大漏らさず取り上げることはできておらず一部の調査項目は分析できていない。

そのうえで、②各カテゴリの調査結果について貧困世帯（貧困Ⅰ）と非貧困世帯を比較し、その相違を分析する。その際、統計的に有意な差があるか否かは分析しておらず、あくまで

も調査結果における割合（%）のポイント差（貧困世帯−非貧困世帯）がどの程度あるのかを示すに留めている。

（２）留意点

既にみたとおり、本稿のレビュー対象には、地理的な偏り、回収率のばらつき（一部の調査における回収率の低さ）、貧困の測定基準の相違が見られる。また、調査ごとに調査項目や回答の選択肢が相違していることが多く、厳密な比較は困難である。

また、紙幅の関係上、本稿では、「貧困世帯」（貧困Ⅰ）と「非貧困世帯」の比較を主軸としており（別言すると、「貧困Ⅰ」と「貧困Ⅱ」の比較、ならびに、「貧困Ⅱ」と「非貧困世帯」の比較はできていない）、世帯構造に着目した分析（ひとり親とふたり親の比較等）は補足的にしか行えていない。

以上の意味で、本稿で行うレビューは、あくまでもコロナ禍において貧困状況で生活する家族の実態を大まかに素描することに限られている。しかしながら、先行研究・調査の蓄積が限られている状況を踏まえるならば、限定的な方法であれその実態を「素描すること」には意義があるものと考えられる。

３．分析結果

抽出された「子どもの生活実態調査」において、コロナ禍と関連する調査項目をカテゴリ化すると以下のように整理できる：（１）保護者の就労状況；（２）世帯の経済状況（暮らし向き、世帯収入、家計・支出）；（３）剥奪経験；（４）子どもの日常生活（食生活、睡眠）；（５）精神状態；（６）家族内での人間関係（親子の会話・時間、親子の葛藤、家族内での葛藤）；（７）子どもの学び（勉強時間、授業がわからなくなった経験）。以下、順に分析結果を見ていく。

（１）保護者の就労状況

まず、保護者の就労状況に関して見ると、貧困世帯の保護者は、非貧困世帯に比して、コロナ禍前／後を問わず不安定な就労状況にあり、他方でコロナ禍によって失業、希望しない転職・仕事の変化を経験していると考えられる。最初に、貧困世帯の保護者の就労状況について確認する。「大田区子どもの生活実態調査」の結果を見る限り、貧困世帯の保護者の就労状況は、非貧困世帯に比して「常勤・正規職員・会社役員」の割合が低く、「パート・アルバイト・非正規職員」の割合が高い（図表 12−４）。この傾向は、特に母親において顕著である。ただし、就労状況の構成割合は、コロナ禍の前／後で大きく変化していない。なお、図表には示していないが、同「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」の結果においても、コロナ禍前／後での目立った変化は見られない。

他方で、より広くコロナ禍が就労状況に及ぼした影響を質問している調査によれば、概して貧困世帯（貧困Ⅰ）の保護者は、非貧困世帯に比して、失業や希望しない転職・仕事の変化を経験している割合が高く、反対に、影響を受けていない（＝「上記のようなことは経験していない」）とする割合が低い（図表 12−５）。ただし、地域、保護者の性別（母親／父親）、子どもの学校段階・学年（小学５年生／中学２年生）により、影響を受けたとする項目や非貧困世帯とのポイント差の大きな項目は異なっている。なお、後述する世帯収入に関しても、

貧困世帯（特に父親）は、非貧困世帯に比して「収入の減少」を経験している割合の高いことが示されている。

また、「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」では、コロナ禍による「仕事の変化はあなたにとって負担になったと思いますか」という質問があり、貧困世帯（困窮度 1）ほど、仕事の変化に負担を感じていることが示されている（図表 12-６）。

図表 12-４．コロナ禍前／後の就労状況

大田区「お子さんのお母さまの／お父さまの（Ａ）新型コロナウイルス感染症拡大前（2020 年２月頃）のご職業について、以下の選択肢から最も近いものをお選びください。」・「お子さんのお母さまの／お父さまの（Ｂ）現在のご職業について、以下の選択肢から最も近いものをお選びください。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
	Ⅰ	Ⅱ			
コロナ禍前（母親）	生活困難層		非生活困難層		
常勤・正規職員・会社役員	19.4	－	34.0	(14.6)	－
パート・アルバイト・非正規職員	55.8	－	37.5	18.3	－
自営業・家業	5.8	－	4.2	1.6	－
その他の職業	0.7	－	0.7	0.0	－
家事専業	13.6	－	22.3	(8.7)	－
学生	0.5	－	0.1	0.4	－
その他	1.5	－	0.3	1.2	－
わからない	0.2	－	0.0	0.2	－
無回答	2.4	－	0.8	1.6	－
現在（母親）	生活困難層		非生活困難層		
常勤・正規職員・会社役員	19.7	－	34.1	(14.4)	－
パート・アルバイト・非正規職員	52.7	－	35.2	17.5	－
自営業・家業	6.3	－	4.3	2.0	－
その他の職業	0.7	－	0.7	0.0	－
家事専業	15.8	－	24.3	(8.5)	－
学生	0.5	－	0.2	0.3	－
その他	1.5	－	0.5	1.0	－
わからない	0.7	－	0.1	0.6	－
無回答	2.2	－	0.7	1.5	－
コロナ禍前（父親）	生活困難層		非生活困難層		
常勤・正規職員・会社役員	71.2	－	90.1	(18.9)	－
パート・アルバイト・非正規職員	7.2	－	1.0	6.2	－
自営業・家業	14.7	－	7.7	7.0	－
その他の職業	1.4	－	0.4	1.0	－
家事専業	0.7	－	0.1	0.6	－
学生	0.0	－	0.0	0.0	－
その他	1.4	－	0.1	1.3	－
わからない	0.7	－	0.0	0.7	－
無回答	2.5	－	0.6	1.9	－
現在（父親）	生活困難層		非生活困難層		
常勤・正規職員・会社役員	72.3	－	89.5	(17.2)	－
パート・アルバイト・非正規職員	6.8	－	1.1	5.7	－
自営業・家業	14.4	－	7.9	6.5	－
その他の職業	0.7	－	0.4	0.3	－
家事専業	0.7	－	0.2	0.5	－
学生	0.0	－	0.0	0.0	－
その他	2.2	－	0.3	1.9	－
わからない	0.7	－	0.0	0.7	－
無回答	2.2	－	0.6	1.6	－

資料：「大田区子どもの生活実態調査」pp. 14-15 に基づき作成

図表 12-５．コロナ禍による就労への影響

横浜市「新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、宛名のお子さんの母親と父親は次のようなことを経験しましたか。」／長野市「新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、宛名のお子さんの母親と父親は次のようなことを経験しましたか。」／四日市市「新型コロナウイルス感染症の拡大により、以下のようなことを経験しましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
横浜市　母親（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
希望しない形での転職	3.7	1.6	0.5	3.2	1.1
失業	3.7	1.6	1.3	2.4	0.3
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	4.4	1.2	0.5	3.9	0.7
希望しない勤務形態の変化	7.4	5.3	3.2	4.2	2.1
希望しない労働時間の減少	27.4	12.1	7.7	19.7	4.4
希望しない時間帯・曜日での勤務	8.9	4.9	1.7	7.2	3.2
収入の減少	43.0	21.1	12.2	30.8	8.9
上記のようなことは経験していない	42.2	60.0	72.0	(29.8)	(12.0)
無回答	5.9	8.8	8.7	(2.8)	0.1
横浜市　母親（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
希望しない形での転職	0.9	3.2	0.9	0.0	2.3
失業	5.2	2.4	1.1	4.1	1.3
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	3.5	2.2	0.4	3.1	1.8
希望しない勤務形態の変化	7.8	4.1	3.3	4.5	0.8
希望しない労働時間の減少	17.4	10.7	7.5	9.9	3.2
希望しない時間帯・曜日での勤務	5.2	3.7	1.8	3.4	1.9
収入の減少	33.0	23.2	13.5	19.5	9.7
上記のようなことは経験していない	50.4	56.8	73.3	(22.9)	(16.5)
無回答	5.2	12.2	6.3	(1.1)	5.9
横浜市　父親（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
希望しない形での転職	2.7	0.2	0.3	2.4	(0.1)
失業	1.3	0.5	0.2	1.1	0.3
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	2.7	0.7	0.4	2.3	0.3
希望しない勤務形態の変化	9.3	8.7	6.1	3.2	2.6
希望しない労働時間の減少	16.0	8.7	2.8	13.2	5.9
希望しない時間帯・曜日での勤務	6.7	4.0	1.0	5.7	3.0
収入の減少	42.7	29.5	16.1	26.6	13.4
上記のようなことは経験していない	40.0	60.4	75.5	(35.5)	(15.1)
無回答	9.3	3.5	2.5	6.8	1.0
横浜市　父親（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
希望しない形での転職	1.4	1.2	0.3	1.1	0.9
失業	2.8	1.2	0.2	2.6	1.0
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	4.2	1.5	0.4	3.8	1.1
希望しない勤務形態の変化	4.2	9.8	7.0	(2.8)	2.8
希望しない労働時間の減少	16.9	13.7	4.0	12.9	9.7
希望しない時間帯・曜日での勤務	4.2	6.0	1.5	2.7	4.5
収入の減少	39.4	34.5	17.2	22.2	17.3
上記のようなことは経験していない	47.9	52.4	73.5	(25.6)	(21.1)
無回答	4.2	5.1	2.3	1.9	2.8
長野市	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
希望しない転職	5.4	1.6	0.6	4.8	1.0
失業	3.9	1.6	0.7	3.2	0.9
勤務先の増加（ダブルワーク等	3.1	1.6	1.1	2.0	0.5
希望しない勤務形態の変化	7.0	6.4	4.7	2.3	1.7
希望しない労働時間の減少	19.4	16.6	9.1	10.3	7.5
希望しない時間帯や曜日での勤務	3.9	2.7	2.7	1.2	0.0
左記のようなことは経験していない	59.7	73.3	84.3	(24.6)	(11.0)
無回答	3.9	2.7	0.9	3.0	1.8

資料：「横浜市子どもの生活実態調査」pp.36-40／「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」pp.23-24／「四日市市子どもの生活実態調査」p.51 に基づき作成

図表 12-５．コロナ禍による就労への影響（続）

四日市市　母親（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
収入の減少	39.3	22.3	13.3	26.0	9.0
失業	5.3	1.8	0.7	4.6	1.1
希望しない転職	2.4	0.4	0.8	1.6	(0.4)
希望しない勤務時間の変化	4.9	3.2	4.1	0.8	(0.9)
希望しない雇用形態の変化	1.5	0.4	0.6	0.9	(0.2)
希望しない労働時間の減少	12.6	6.7	5.8	6.8	0.9
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	4.9	1.5	1.2	3.7	0.3
上記のようなことは経験していない	41.7	58.2	71.7	(30.0)	(13.5)
不明・無回答	11.7	14.5	9.5	2.2	5.0
四日市市　母親（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
収入の減少	42.0	20.0	12.6	29.4	7.4
失業	7.1	1.5	1.0	6.1	0.5
希望しない転職	5.4	0.8	0.9	4.5	(0.1)
希望しない勤務時間の変化	7.6	3.6	2.0	5.6	1.6
希望しない雇用形態の変化	3.1	0.1	0.1	3.0	0.0
希望しない労働時間の減少	12.9	7.6	4.6	8.3	3.0
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	4.5	2.8	1.7	2.8	1.1
上記のようなことは経験していない	42.0	59.4	71.2	(29.2)	(11.8)
不明・無回答	10.3	13.8	9.9	0.4	3.9
四日市市　父親（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
収入の減少	49.5	31.5	16.2	33.3	15.3
失業	3.1	0.6	0.0	3.1	0.6
希望しない転職	4.1	0.6	0.5	3.6	0.1
希望しない勤務時間の変化	9.3	3.3	2.3	7.0	1.0
希望しない雇用形態の変化	1.0	0.3	0.2	0.8	0.1
希望しない労働時間の減少	17.5	8.8	3.9	13.6	4.9
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	5.2	1.0	0.6	4.6	0.4
上記のようなことは経験していない	39.2	63.8	80.4	(41.2)	(16.6)
*不明・無回答除く					
四日市市　父親（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
収入の減少	56.0	31.4	17.5	38.5	13.9
失業	6.0	0.5	0.1	5.9	0.4
希望しない転職	2.4	0.5	0.0	2.4	0.5
希望しない勤務時間の変化	2.4	3.8	1.9	0.5	1.9
希望しない雇用形態の変化	0.0	0.8	0.2	(0.2)	0.6
希望しない労働時間の減少	9.5	8.3	3.4	6.1	4.9
勤務先の増加（ダブルワーク等）・副業	3.6	0.8	0.5	3.1	0.3
上記のようなことは経験していない	39.3	64.9	79.4	(40.1)	(14.5)
＊不明・無回答除く					

資料：「横浜市子どもの生活実態調査」pp.36-40／「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」pp.23-24／「四日市市子どもの生活実態調査」p.51 に基づき作成

図表 12-６．コロナ禍による就労状況への影響と負担感

神戸市「新型コロナウイルス感染症の影響により、あなたの仕事に変化はありましたか」「a　あなたの職場や職種が変わる、または仕事内容が変わるなどの変化はありましたか」（最も影響が大きかったもの）「b　仕事の変化はあなたにとって負担になったと思いますか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
変化	困窮度1	困窮度2	中央値以上		
変化はなかった	42.2	60.7	65.9	(23.7)	(5.2)
テレワークなど勤務場所が変わった	－	3.1	8.6	－	(5.5)
時差通勤になった	1.2	1.2	1.5	(0.3)	(0.3)
勤務形態（パート等など）が変更になっ	1.7	0.9	0.6	1.1	0.3
勤務時間・日数が変更になった	14.8	10.9	7.2	7.6	3.7
休業を命じられた	5.4	4.0	2.1	3.3	1.9
職種が変更になった	1.4	1.0	0.4	1.0	0.6
失業した（職場都合での失業）	3.0	－	－	－	－
退職した（自主退職）	3.4	－	－	－	－
別の職場へ転職した	4.2	2.5	－	－	－
その他	9.7	5.6	4.6	5.1	1.0
無回答	11.0	7.2	5.4	5.6	1.8
負担	困窮度1	困窮度2	中央値以上		
まったく負担に感じなかった	3.4	8.7	16.7	(13.3)	(8.0)
あまり負担に感じなかった	11.6	22.4	33.1	(21.5)	(10.7)
まあまあ負担に感じた	40.3	42.6	17.0	23.3	25.6
とても負担に感じた	38.7	21.9	11.9	26.8	10.0
無回答	6.0	4.4	4.0	2.0	0.4

資料：「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」pp. 150-151 に基づき作成

（２）世帯の経済状況

次に、貧困世帯の経済状況がコロナ禍でどのように変化したのかを確認すると、①貧困世帯は、非貧困世帯に比して、コロナ禍による暮らし向きの悪化、ならびに、世帯収入の大幅な減少を経験しており、同時に、②高い割合でコロナ禍による支出増（特に子ども関連や通信費等）や家計上の課題（赤字、借金増等）に直面していると考えられる。

①世帯の暮らし向きと世帯収入

まず、「横浜市子どもの生活実態調査」、ならびに、「新宮市子どもの生活実態調査」によれば、貧困世帯では、調査回答時の暮らし向きがコロナ禍前よりも「今の方が苦しい」／悪くなった（「悪くなった」＋「少し悪くなった」）とする割合が非貧困世帯に比して高く、反対に暮らし向きが「変わらない」とする割合は低い（図表 12-７）。ただし、新宮市の調査（中学２年生保護者）では、暮らし向きが「少し悪くなった」と回答する割合が非貧困世帯において最も高かったことが示されており、非貧困世帯においても暮らし向きが悪化していることがうかがえる。

以上と関連して、一部の調査では、より具体的にコロナ禍前／後で世帯収入がどのように変化したかを調査している。これらの調査によれば、貧困世帯は、非貧困世帯に比して、世帯収入がコロナ禍前に比べて「減った」（一部見込みを含む）とする割合が高く、反対に「変わらない」とする割合が低い（図表 12-８）。

また、「武雄市子どもの生活実態調査」、「長崎市子どもの生活に関する実態調査」、「沖縄子ども調査」では、コロナ禍によって、具体的にどの程度の世帯収入の減少が生じているのかを調べている（図表 12-９）。これらの調査によれば、貧困世帯（特に貧困Ⅰ）は、非貧困世帯に比して、世帯収入の減少割合が高い（５割以上）とする割合が高い。ここで、「長崎

市子どもの生活に関する実態調査」（世帯収入が「減少した」と回答した者に限定して、その減少の程度を調査）に着目してみると、世帯収入の減少程度を「１割程度」または「２～３割程度減少した」とする割合は非貧困世帯で高く、他方で、「４～５割程度減少した」とする割合は貧困世帯で高い。

図表 12-７．世帯の暮らし向き

横浜市「現在の暮らしの状況は、新型コロナウイルス感染症拡大前の2020 年１月頃と比べて、どうですか。」／新宮市「あなたの暮らしの状況は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う影響で、良くなったり悪くなったりしましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
横浜市（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
今の方が楽	3.7	1.8	5.0	(1.3)	(3.2)
変わらない	36.0	65.2	78.0	(42.0)	(12.8)
今の方が苦しい	54.4	27.6	13.9	40.5	13.7
わからない・答えたくない	5.1	4.7	2.8	2.3	1.9
無回答	0.7	0.6	0.3	0.4	0.3
横浜市（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
今の方が楽	4.2	1.2	3.5	0.7	(2.3)
変わらない	46.2	57.9	77.3	(31.1)	(19.4)
今の方が苦しい	42.0	33.5	16.0	26.0	17.5
わからない・答えたくない	7.6	6.7	2.0	5.6	4.7
無回答	0.0	0.7	1.1	(1.1)	(0.4)
新宮市（小5）	所得段階Ⅲ	所得段階Ⅱ	所得段階Ⅰ		
良くなった	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
少し良くなった	0.0	1.5	0.0	0.0	1.5
変わらない	50.0	37.3	62.2	(12.2)	(24.9)
少し悪くなった	31.3	47.8	30.0	1.3	17.8
悪くなった	18.8	13.4	7.8	11.0	5.6
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
新宮市（中2）	所得段階Ⅲ	所得段階Ⅱ	所得段階Ⅰ		
良くなった	4.2	0.0	0.0	4.2	0.0
少し良くなった	0.0	0.0	1.3	(1.3)	(1.3)
変わらない	41.7	54.5	57.3	(15.6)	(2.8)
少し悪くなった	20.8	34.5	34.7	(13.9)	(0.2)
悪くなった	33.3	10.9	6.7	26.6	4.2
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

資料：「横浜市子どもの生活実態調査」p. 132；「新宮市子どもの生活実態調査」p. 202 に基づき作成

図表 12-８．コロナ禍による世帯収入の変化

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／文京区「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／福井県「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　世帯全体の収入の変化	A世帯		B世帯		
増えた	0.7	－	1.5	(0.8)	－
減った	39.9	－	26.6	13.3	－
変わらない	58.0	－	70.8	(12.8)	－
無回答	1.4	－	1.2	0.2	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	1.4	5.3	9.8	(8.4)	(4.5)
減った	63.4	35.2	15.8	47.6	19.4
変わらない	35.2	59.2	74.3	(39.1)	(15.1)
無回答	0.0	0.3	0.2	(0.2)	0.1
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	1.2	2.2	9.0	(7.8)	(6.8)
減った	56.1	36.1	17.0	39.1	19.1
変わらない	42.7	61.4	73.5	(30.8)	(12.1)
無回答	0.0	0.4	0.4	(0.4)	0.0
文京区　収入が減った・減る見込み	事業利用者調査		全体調査		
あてはまる	45.7	－	18.6	27.1	－
どちらともいえない	17.9	－	12.4	5.5	－
あてはまらない	24.4	－	62.1	(37.7)	－
無回答	12.0	－	6.9	5.1	－
福井県　世帯全体の収入の変化（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	1.5	1.2	1.2	0.3	0.0
減った	39.7	32.2	20.0	19.7	12.2
変わらない	58.8	66.6	78.8	(20.0)	(12.2)
福井県　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	1.3	2.8	2.1	(0.8)	0.7
減った	50.7	36.3	23.8	26.9	12.5
変わらない	48.0	60.9	74.2	(26.2)	(13.3)
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	1.6	0.0	3.0	(1.4)	(3.0)
減った	52.7	41.7	17.5	35.2	24.2
変わらない	45.0	57.8	78.7	(33.7)	(20.9)
無回答	0.8	0.5	0.8	0.0	(0.3)
福岡市　同上	300万未満	300～600万未満	600万以上		
増えた	3.4	4.2	5.9	(2.5)	(1.7)
減った	52.7	37.3	18.8	33.9	18.5
変わらない	43.9	58.5	75.3	(31.4)	(16.8)

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 170 に基づき作成

図表 12-9．世帯収入の減少割合

大田区「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言発令前と、緊急事態宣言発令後を比べて、お子さんと生計を共にしている世帯全員の方の、月間収入（税込）の合計は、最大でどれくらい変わりましたか。」／武雄市「新型コロナウイルス感染症の流行が長期化する中、あなたの世帯では年間収入（世帯年収）への影響がありますか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」⇒前の質問の「世帯全体の収入の変化」で、「世帯全体の収入が「減った」と答えた場合、世帯全体の月間収入は、最大でどのくらい減りましたか」／沖縄県「あなたの世帯では、新型コロナウイルスの感染拡大（2020年2月頃）の前と比べて、現在の世帯収入は減りましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ-(b)	(a) Ⅱ-(b)
大田区	生活困難層		非生活困難層		
増加した	1.7	-	1.9	(0.2)	-
変わらなかった	31.8	-	62.6	(30.8)	-
1割程度減少した	17.0	-	15.9	1.1	-
2～3割程度減少した	23.0	-	11.6	11.4	-
4～5割程度減少した	8.1	-	2.5	5.6	-
6～7割程度減少した	4.5	-	0.9	3.6	-
8～9割程度減少した	1.9	-	0.4	1.5	-
10割減少した（ゼロになった）	2.6	-	0.2	2.4	-
わからない	7.7	-	2.7	5.0	-
無回答	1.7	-	1.2	0.5	-
大田区　ひとり親調査	ひとり親		再掲		
増加した	1.5	-	1.9	(0.4)	-
変わらなかった	43.7	-	62.6	(18.9)	-
1割程度減少した	10.8	-	15.9	(5.1)	-
2～3割程度減少した	18.1	-	11.6	6.5	-
4～5割程度減少した	5.8	-	2.5	3.3	-
6～7割程度減少した	1.5	-	0.9	0.6	-
8～9割程度減少した	2.0	-	0.4	1.6	-
10割減少した（ゼロになった）	2.6	-	0.2	2.4	-
わからない	7.0	-	2.7	4.3	-
無回答	6.9	-	1.2	5.7	-
武雄市　世帯収入への影響	困難度が高い		それ以外		
影響はほとんどない	45.1	-	61.2	(16.1)	-
1～2割程度減少（しそう）	32.4	-	29.5	2.9	-
3～4割程度減少（しそう）	11.4	-	6.5	4.9	-
5割以上減少（しそう）	6.9	-	1.5	5.4	-
収入の目途が立たない	2.3	-	0.0	2.3	-
増加（しそう）	0.0	-	0.3	(0.3)	-
無回答	2.0	-	0.9	1.1	-
沖縄県　世帯収入（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
変化なし	35.4	48.1	69.6	(34.2)	(21.5)
1～3割減った	31.5	34.1	20.7	10.8	13.4
3～5割減った	16.0	8.9	2.4	13.6	6.5
5割以上減った	13.6	3.1	1.1	12.5	2.0
まったくなくなった	2.1	2.1	2.4	(0.3)	(0.3)
増えた	0.6	3.1	3.5	(2.9)	(0.4)
無回答	0.8	0.7	0.3	0.5	0.4
沖縄県　世帯収入（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
変化なし	32.7	47.3	71.2	(38.5)	(23.9)
1～3割減った	34.9	32.3	18.6	16.3	13.7
3～5割減った	16.4	12.1	4.8	11.6	7.3
5割以上減った	11.8	4.0	0.6	11.2	3.4
まったくなくなった	2.2	2.2	1.4	0.8	0.8
増えた	1.4	2.0	3.0	(1.6)	(1.0)
無回答	0.6	0.2	0.5	0.1	(0.3)

資料：「大田区子どもの生活実態調査」；武雄市子どもの生活実態調査」；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」；「沖縄子ども調査」に基づき作成

図表 12-９．世帯収入の減少割合（続）

長崎市　世帯全体の収入の変化（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	3.1	－	3.2	(0.1)	－
減った	45.3	－	28.9	16.4	－
変わらない	50.3	－	67.1	(16.8)	－
無回答	1.2	－	0.8	0.4	－
長崎市　世帯全体の収入の変化（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	3.1	－	2.7	0.4	－
減った	56.6	－	27.9	28.7	－
変わらない	36.4	－	68.2	(31.8)	－
無回答	3.9	－	1.3	2.6	－
長崎市　減少の程度（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
1割程度減少した	15.1	－	37.2	(22.1)	－
2～3割程度減少した	30.1	－	38.5	(8.4)	－
4～5割程度減少した	15.1	－	6.5	8.6	－
6～7割程度減少した	6.8	－	2.2	4.6	－
8～9割程度減少した	4.1	－	1.6	2.5	－
10割減少した（ゼロになった）	1.4	－	0.3	1.1	－
わからない	26.0	－	12.1	13.9	－
無回答	1.4	－	1.6	(0.2)	－
長崎市　減少の程度（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
1割程度減少した	20.5	－	33.3	(12.8)	－
2～3割程度減少した	39.7	－	42.0	(2.3)	－
4～5割程度減少した	17.8	－	6.7	11.1	－
6～7割程度減少した	2.7	－	2.2	0.5	－
8～9割程度減少した	2.7	－	0.3	2.4	－
10割減少した（ゼロになった）	1.4	－	1.0	0.4	－
わからない	13.7	－	12.2	1.5	－
無回答	1.4	－	2.2	(0.8)	－

資料：「大田区子どもの生活実態調査」；武雄市子どもの生活実態調査」；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」；「沖縄子ども調査」に基づき作成

②家計・消費

次いで、視点を変えて、コロナ禍が貧困世帯における家計や消費にどのように影響しているかを検討する。まず、家計について、「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」によれば、コロナ禍前／後を問わず、貧困世帯を含むと考えられる事業利用者調査の回答者は、全体調査に比して、家計が「赤字」であるとする割合が高く、反対に「黒字」であるとする割合が低い。また、コロナ禍前／後を比較すると、事業利用者調査では、全体調査に比して、家計が「赤字」であるとする割合の上昇幅が大きく、同時に「黒字」であるとする割合の減少幅が大きい（図表 12-10）。加えて、同調査では、世帯タイプ別により詳細な家計状況を調査しており、とりわけ事業利用者のひとり親世帯が苦しい家計状況に置かれていることが示されている（図表 12-10）。

図表では割愛しているが、同じく文京区の調査では、各世帯の消費支出状況の変化を調査している。同調査によれば、事業利用者調査の回答者は、全体調査に比して、「支出が増えた・増える見込みになった」に「あてはまる」とする割合が高く、「あてはまらない」とする割合が低い。この点について、他にもコロナ禍前／後での「生活に必要な支出の変化」を調べた調査によれば、貧困世帯においては、非貧困世帯に比して、「増えた」とする割合が高く、反対に「変わらない」とする割合が低い。ただし、貧困世帯と非貧困世帯との間のポイント差が大きい地域と、相対的に小さい地域（米沢市、長野市）があり、いずれも支出状況が「変わらない」とする割合が貧困世帯においても７割を超えていることに留意が必要である。

図表 12-10. コロナ禍による家計の変化

文京区「あなたのご家庭の家計について、それぞれあてはまるものに1つに○を付けてください。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
コロナ禍前	事業利用者調査		全体調査		
赤字	22.3	－	5.5	16.8	－
赤字でもなく黒字でもない	37.8	－	14.5	23.3	－
黒字	25.1	－	71.5	(46.4)	－
その他	2.7	－	1.4	1.3	－
無回答	12.0	－	7.1	4.9	－
コロナ禍後	事業利用者調査		全体調査		
赤字	43.0	－	11.6	16.2	－
赤字でもなく黒字でもない	27.8	－	14.7	0.8	－
黒字	15.5	－	65.1	(63.4)	－
その他	1.7	－	1.5	10.5	－
無回答	12.0	－	7.1	4.9	－
コロナ禍前	事業利用者調査 (a)ひとり親	事業利用者調査 (b)ふたり親	全体調査 (c)ひとり親	全体調査 (d)ふたり親	(a)－(d)
赤字であり、借金をして生活している	7.1	3.2	5.1	1.7	5.4
赤字であり、貯金を切り崩している	16.8	18.3	15.3	2.7	14.1
赤字でも黒字でもなく、ギリギリである	34.8	44.4	19.7	14.3	20.5
黒字であるが、貯金はしていない	8.4	12.7	10.2	8.0	0.4
黒字であり、定期的に貯金をしている	18.7	11.9	39.4	65.9	(47.2)
その他	3.9	1.6	2.2	1.3	2.6
無回答	10.3	7.9	8.0	6.2	4.1
コロナ禍後					
赤字であり、借金をして生活している	13.5	9.5	5.8	2.8	10.7
赤字であり、貯金を切り崩している	32.3	33.3	24.8	7.4	24.9
赤字でも黒字でもなく、ギリギリである	25.8	31.7	19.7	14.4	11.4
黒字であるが、貯金はしていない	7.7	9.5	8.0	8.9	(1.2)
黒字であり、定期的に貯金をしている	9.0	5.6	31.4	58.9	(49.9)
その他	1.3	2.4	2.2	1.4	(0.1)
無回答	10.3	7.9	8.0	6.2	4.1

資料：文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」pp. 29-30 に基づき作成

図表 12-11. コロナ禍による生活に必要な支出の変化

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／福井県「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　生活に必要な支出の変化	A世帯	－	B世帯		
増えた	47.6	－	37.7	9.9	－
減った	8.4	－	6.4	2.0	－
変わらない	71.3	－	54.6	16.7	－
無回答	2.1	－	1.3	0.8	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	57.5	51.3	38.6	18.9	12.7
減った	7.0	6.7	9.2	(2.2)	(2.5)
変わらない	35.2	41.3	51.8	(16.6)	(10.5)
無回答	0.0	0.6	0.4	(0.4)	0.2
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	64.6	52.3	37.2	27.4	15.1
減った	3.7	6.5	7.1	(3.4)	(0.6)
変わらない	30.5	41.2	55.0	(24.5)	(13.8)
無回答	1.2	0.0	0.6	0.6	(0.6)
福井県　生活に必要な支出の変化（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	52.9	34.9	25.3	27.6	9.6
減った	5.9	7.4	6.9	(1.0)	0.5
変わらない	41.2	57.7	67.8	(26.6)	(10.1)
福井県　生活に必要な支出の変化（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	50.7	42.8	26.7	24.0	16.1
減った	4.0	5.3	7.0	(3.0)	(1.7)
変わらない	45.3	51.9	66.3	(21.0)	(14.4)
長野市　生活に必要な支出の変化	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	12.4	7.5	4.0	8.4	3.5
減った	1.6	2.7	1.2	0.4	1.5
変わらない	83.7	89.3	93.8	(10.1)	(4.5)
無回答	2.3	0.5	1.0	1.3	(0.5)
福岡市　生活に必要な支出の変化	300万未満	300～600万未満	600万以上		
増えた	69.2	59.2	43.5	25.7	15.7
減った	3.7	4.0	5.7	(2.0)	(1.7)
変わらない	27.1	36.8	50.8	(23.7)	(14.0)
長崎市　生活に必要な支出の変化（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	44.1	－	34.8	9.3	－
減った	5.6	－	6.6	(1.0)	－
変わらない	46.6	－	57.4	(10.8)	－
無回答	3.7	－	1.2	2.5	－
長崎市　生活に必要な支出の変化（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	45.7	－	36.5	9.2	－
減った	12.4	－	7.4	5.0	－
変わらない	38.0	－	54.0	(16.0)	－
無回答	3.9	－	2.1	1.8	－

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 171；「福井県子どもの生活状況調査」p.9；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 100；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 50；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 56 に基づき作成

図表 12-12. コロナ禍による支出増（抜粋）

大田区「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための公立小学校臨時休業によるあなたのご家庭の家計の状況として、次のようなものは増えましたか、減りましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
通信費	生活困難層		非生活困難層		
とても増えた	25.1	－	11.3	13.8	－
少し増えた	23.2	－	22.4	0.8	－
変わらない	48.6	－	63.6	(15.0)	－
少し減った	1.0	－	0.7	0.3	－
とても減った	0.0	－	0.2	(0.2)	－
そもそもない	0.0	－	0.2	(0.2)	－
無回答	2.2	－	1.6	0.6	－
赤字					
とても増えた	25.4	－	3.1	22.3	－
少し増えた	25.4	－	10.0	15.4	－
変わらない	28.5	－	28.4	0.1	－
少し減った	1.2	－	1.5	(0.3)	－
とても減った	0.5	－	0.7	(0.2)	－
そもそもない	16.5	－	54.5	(38.0)	－
無回答	2.6	－	1.8	0.8	－
借金					
とても増えた	10.3	－	0.3	10.0	－
少し増えた	10.0	－	0.9	9.1	－
変わらない	34.0	－	31.6	2.4	－
少し減った	1.0	－	0.5	0.5	－
とても減った	0.0	－	0.2	(0.2)	－
そもそもない	42.3	－	64.9	(22.6)	－
無回答	2.4	－	1.6	0.8	－

資料:「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」pp. 64-68 に基づき作成

以上の調査に加えて、「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」、「日野市子どもの生活実態調査」では、具体的な項目ごとに支出状況の変化を調べている。以下では、便宜的に、支出が「とても増えた」＋「少し増えた」とする割合に着目して、貧困世帯と非貧困世帯の同数値のポイント差が 10 以上あった項目を抽出して分析している。

まず、「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」によれば、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、「通信費」、「赤字」、「借金」に関して「とても増えた」または「少し増えた」とする割合が高い。なお、留意点として、一部の項目で支出が「そもそもない」とする割合に相違が見られたことが挙げられる（図表 12-12）。具体的には、「子どもの教材費（オンライン教材含む）」（貧困世帯 8.6%：非貧困世帯 1.7%）、「子どもの遊具費」（同左 4.8%：1.3%）、「娯楽費」（同左 5.3%：1.1%）。この点は、コロナ禍前から、一部の貧困世帯において当該項目への支出をしていない（できていない）ことを示唆している。

また、「日野市子どもの生活実態調査」によれば、上記と同様に貧困世帯において「赤字」や「借金」に関して「とても増えた」または「少し増えた」とする割合が高い（図表 12-13）。なお、同じ貧困世帯であっても小学５年生の保護者（「日用品費（衛生用品含む）」、「赤字」、「借金」が抽出条件に該当）よりも、中学２年生の保護者（「食費」、「水道光熱費」、「通信費（インターネット利用料を含む）」、「子どもの遊具費」、「赤字」、「借金」）の方がコロナ禍による支出増の影響を被っていると考えられる。

図表 12-13. コロナ禍による支出項目ごとの変化

日野市「コロナでの家計の変化について」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ-(b)	(a) Ⅱ-(b)
日用品費（小5）	困窮層		一般層		
とても増えた	45.2	-	18.8	26.4	-
少し増えた	41.9	-	49.0	(7.1)	-
変わらない	6.5	-	26.4	(19.9)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	-	-	-	-	-
無回答	-	-	-	-	-
赤字（小5）	困窮層		一般層		
とても増えた	41.9	-	4.8	37.1	-
少し増えた	32.3	-	11.7	20.6	-
変わらない	6.5	-	29.5	(23.0)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	16.1	-	45.8	(29.7)	-
無回答	-	-	-	-	-
借金（小5）	困窮層		一般層		
とても増えた	16.1	-	1.2	14.9	-
少し増えた	16.1	-	1.4	14.7	-
変わらない	22.6	-	30.9	(8.3)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	41.9	-	58.7	(16.8)	-
無回答	-	-	-	-	-

資料：「日野市子どもの生活実態調査」pp. 40-43 に基づき作成

図表 12-13. コロナ禍による支出項目ごとの変化（続）

食費（中2）	困窮層		一般層		
とても増えた	83.0	-	47.7	35.3	-
少し増えた	14.9	-	32.5	(17.6)	-
変わらない	0.0	-	9.5	(9.5)	-
少し減った	0.0	-	-	-	-
とても減った	0.0	-	-	-	-
そもそもない	0.0	-	-	-	-
無回答	0.0	-	-	-	-
水道光熱費（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	59.6	-	34.2	25.4	-
少し増えた	36.2	-	44.3	(8.1)	-
変わらない	2.1	-	12.1	(10.0)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	-	-	-	-	-
無回答	-	-	-	-	-
通信費（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	10.6	-	11.8	(1.2)	-
少し増えた	29.8	-	17.8	12.0	-
変わらない	55.3	-	60.2	(4.9)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	-	-	-	-	-
無回答	-	-	-	-	-
日用品費（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	42.6	-	22.3	20.3	-
少し増えた	44.7	-	43.7	1.0	-
変わらない	10.6	-	23.8	(13.2)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	-	-	-	-	-
無回答	-	-	-	-	-
子どもの遊具費（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	10.6	-	3.5	7.1	-
少し増えた	21.3	-	16.5	4.8	-
変わらない	59.6	-	62.3	(2.7)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	-	-	-	-	-
無回答	-	-	-	-	-
赤字（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	46.8	-	5.8	41.0	-
少し増えた	34.0	-	12.6	21.4	-
変わらない	17.0	-	31.8	(14.8)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	0.0	-	-	-	-
そもそもない	0.0	-	38.0	(38.0)	-
無回答	0.0	-	-	-	-
借金（中2）	**困窮層**		**一般層**		
とても増えた	14.9	-	1.7	13.2	-
少し増えた	21.3	-	2.3	19.0	-
変わらない	25.5	-	31.3	(5.8)	-
少し減った	-	-	-	-	-
とても減った	-	-	-	-	-
そもそもない	36.2	-	52.4	(16.2)	-
無回答	-	-	-	-	-

資料：「日野市子どもの生活実態調査」pp. 40-43 に基づき作成

（３）剥奪経験

上記のような世帯収入・家計・消費状況の変化を背景に生じている剥奪経験（経済的な理由で購入、支払い等ができなかった経験）を見てみると、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、基本的な必要（食料、衣服、公共料金等）のみならず、子どもの体験に関する剥奪経験をしている割合が高いと考えられる。ただし、必ずしもこれらの剥奪経験すべてが、コロナ

禍によって生じた（あるいは、悪化した）ものとは考えられないことに留意が必要である。

まず、「お金が足りなくて、必要な食料や衣服を買えないこと」を質問した調査によれば、貧困世帯は、非貧困世帯に比して、剥奪経験がコロナ禍により「増えた」とする割合が高く、反対に「変わらない」とする割合が低い（図表 12-14）。なお、ここでは、「変わらない」という回答の含意に留意が必要である。そもそも、貧困世帯において剥奪が生じる可能性が高いことを鑑みれば、貧困世帯の場合、コロナ禍の前後を問わず同程度に剥奪経験が「ある」という意味で「変わらない」としている可能性がある。反対に、非貧困世帯においてはコロナ禍の前後を問わず剥奪経験が「ない」という意味で「変わらない」としている可能性がある。

また、「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」では、コロナ禍前／後で「経済的理由で諦めた経験」を質問している。図表 12-15 では、コロナ禍後の「できないことがあった」項目のうち、全体調査と事業利用者調査の回答割合のポイント差が大きかった上位５項目を抜粋して掲載している。この図表によれば、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、「衣類」や「食糧」という必需品に加えて「子どもの遊びのための費用の支払い」や「学習教材の支払い」に関する剥奪が高い割合で生じていることがわかる。ただし、事業利用者調査の剥奪経験に関して、コロナ禍前／後の比較を見てみると、コロナ禍前よりもコロナ禍後の方が「できないことがあった」とする割合が上昇しているものの、その差は５ポイント程度と小さい。

以上に加えて「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」と「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」では、「過去１年の間に、経済的な理由のために」支払えなかった剥奪経験を質問している。図表 12-15 では、剥奪経験が「あった」とする割合に注目し、「なかった」、「該当しない（支払う必要がない）」、「無回答」は割愛している。図表 12-15 によれば、貧困世帯は、基本的必要に関わるすべての項目において、非貧困世帯よりも剥奪経験が「あった」とする割合が高い[4]。なお、貧困世帯において、これらの剥奪経験の理由として３～４割程度しか「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う収入減少」を挙げていないことには留意が必要である。このことから、コロナ禍の前／後を問わず一貫して剥奪経験をしている貧困世帯が一定割合で存在していると考えられる。

[4] 念のため付記すると、大田区及び長野市の調査では、貧困の測定基準として剥奪経験を含めているため、非貧困世帯において剥奪経験が生じていないのは当然である。しかし、貧困世帯（貧困Ⅰ及びⅡ）がどのような項目で、どの程度の剥奪を経験しているかを示すために非貧困世帯との対比を含めてここで分析を行っている。

図表 12-14. お金が足りなくて、必要な食料や衣服を買えないこと

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／福井県「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）		
	Ⅰ	Ⅱ		(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　お金が足りなくて、必要な食料や衣服を買えないこと	A世帯		B世帯		
増えた	24.5	－	11.5	13.0	－
減った	2.1	－	1.5	0.6	－
変わらない	71.3	－	84.8	(13.5)	－
無回答	2.1	－	2.2	(0.1)	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	39.4	14.1	3.4	36.0	10.7
減った	7.0	3.2	3.4	3.6	(0.2)
変わらない	53.5	82.1	92.1	(38.6)	(10.0)
無回答	0.0	0.6	1.1	(1.1)	(0.5)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	28.0	13.0	5.0	23.0	8.0
減った	2.4	4.7	1.9	0.5	2.8
変わらない	67.1	82.3	92.6	(25.5)	(10.3)
無回答	2.4	0.0	0.4	2.0	(0.4)
福井県　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	20.6	6.8	2.5	18.1	4.3
減った	1.5	2.6	0.9	0.6	1.7
変わらない	77.9	90.5	96.6	(18.7)	(6.1)
福井県　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	28.4	12.3	2.7	25.7	9.6
減った	4.1	1.7	1.7	2.4	0.0
変わらない	67.6	86.0	95.6	(28.0)	(9.6)
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	9.3	0.5	0.2	9.1	0.3
減った	0.0	0.5	0.0	0.0	0.5
変わらない	88.4	98.4	98.8	(10.4)	(0.4)
無回答	2.3	0.5	1.0	1.3	(0.5)
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	49.5	26.0	8.3	41.2	17.7
減った	3.1	1.7	1.2	1.9	0.5
変わらない	47.4	72.3	90.5	(43.1)	(18.2)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	25.5	－	10.8	14.7	－
減った	3.7	－	1.3	2.4	－
変わらない	67.7	－	85.9	(18.2)	－
無回答	3.1	－	2.0	1.1	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	34.1	－	11.3	22.8	－
減った	3.1	－	1.9	1.2	－
変わらない	57.4	－	84.8	(27.4)	－
無回答	5.4	－	2.0	3.4	－

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 172；「福井県子どもの生活状況調査」p.9；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 101；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 51；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 57 に基づき作成

図表 12-15. 経済的理由で諦めた経験

文京区「あなたのご家庭で経済的な理由で以下のことができなかったことがありますか。それぞれあてはまるものに1つに○を付けてください。」／大田区・「あなたのご家庭では、過去１年の間に、経済的な理由のために以下の項目を支払えないことがありましたか。」⇒「上記のような料金等が支払えないことがあったのは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う収入減少によるものですか。」／長野市「あなたのご家庭では、過去１年の間に、次の料金などについて経済的な理由で支払えなかったことがありましたか。」⇒上記の「料金などが支払えないことがあったのは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う収入減少によるものですか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
	Ⅰ	Ⅱ			
文京区　できないことがあった（拡大後）	事業利用者調査		全体調査		
衣類の購入	56.0	－	23.7	32.3	－
食料の購入	48.1	－	20.1	28.0	－
学習教材の支払い	33.0	－	13.5	19.5	－
遊びのための費用の支払い	55.7	－	22.7	33.0	－
その他経費の支払い	53.6	－	21.9	31.7	－
大田区　あった	生活困難層		非生活困難層		
電話料金	16.5	－	0.0	16.5	－
電気料金	14.8	－	0.0	14.8	－
ガス料金	13.6	－	0.0	13.6	－
水道料金	16.0	－	0.0	16.0	－
家賃	13.2	－	0.0	13.2	－
住宅ローン	4.5	－	0.2	4.3	－
その他の債務	17.5	－	0.7	16.8	－
大田区　ひとり親調査　あった	ひとり親調査		再掲		
電話料金	8.8	－	0.0	8.8	－
電気料金	7.7	－	0.0	7.7	－
ガス料金	7.0	－	0.0	7.0	－
水道料金	7.4	－	0.0	7.4	－
家賃	9.4	－	0.0	9.4	－
住宅ローン	1.3	－	0.2	1.1	－
社会保険料（年金・健康保険など）	11.4	－	－	－	－
その他の債務	11.3	－	0.7	10.6	－
大田区（剥奪の理由）	生活困難層		非生活困難層		
コロナ禍による収入減少によるもの	36.5	－	41.7	(5.2)	－
それ以外の理由によるもの	54.1	－	58.3	(4.2)	－
無回答	9.5	－	0.0	9.5	－
大田区　ひとり親調査（剥奪の理由）	ひとり親調査		再掲		
コロナ禍による収入減少によるもの	31.8	－	41.7	(9.9)	－
それ以外の理由によるもの	62.6	－	58.3	4.3	－
無回答	5.7	－	0.0	5.7	－
長野市　あった	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
電話料金	19.4	1.6	0.0	19.4	1.6
電気料金	17.1	1.6	0.0	17.1	1.6
ガス料金	15.5	1.6	0.0	15.5	1.6
水道料金	23.3	2.1	0.0	23.3	2.1
家賃（または住宅ローン）	17.1	3.2	0.0	17.1	3.2
長野市（剥奪の理由）					
コロナ禍による収入減少によるもの	38.1	38.5	0.0	38.1	38.5
それ以外の理由によるもの	61.9	61.5	0.0	61.9	61.5
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

資料：文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」p. 33；「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」pp. 57-64・pp. 276-277；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」pp. 83-88 に基づき作成

図表 12-16. 生理用品の剥奪経験

新宮市「あなたのご家庭では、過去１年とそれ以前で、お金が足りないことを理由として以下のものを買えないことがありましたか」（2019年度＝コロナ禍以前、2020年度＝コロナ禍後）

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
新宮市　生理用品（コロナ禍後）（小5）	所得段階Ⅲ	所得段階Ⅱ	所得段階Ⅰ		
よくあった	6.3	0.0	0.0	6.3	(6.3)
ときどきあった	6.3	1.5	0.0	6.3	(4.8)
まれにあった	6.3	1.5	1.1	5.2	(3.7)
まったくなかった	75.0	95.5	97.8	(22.8)	118.3
不明・無回答	6.3	1.5	1.1	5.2	0.4
新宮市　生理用品（コロナ禍後）（中2）	所得段階Ⅲ	所得段階Ⅱ	所得段階Ⅰ		
よくあった	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ときどきあった	4.2	1.8	1.3	2.9	(1.1)
まれにあった	4.2	1.8	0.0	4.2	(2.4)
まったくなかった	91.7	96.4	98.7	(7.0)	103.4
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

資料：「新宮市子どもの生活実態調査」に基づき作成

この他、「新宮市子どもの生活実態調査」では、他の調査では設定されていない調査項目として「家族が必要とする生理用品を買うことができなかった」というものがある。この調査によれば、貧困世帯では、コロナ禍後における生理用品の剥奪経験（「よくあった」＋「ときどきあった」＋「まれにあった」）をしている割合が、非貧困世帯に比して、高くなっている（図表 12-16）。なお、コロナ禍以前は、貧困世帯（小学５年生の世帯及び中学２年生の世帯ともに）同剥奪経験が「よくあった」又は「ときどきあった」とする回答はなく（0.0%）、「まれにあった」（小学５年生＝12.5%、中学２年生＝4.2%）という回答に限られていた。この点を踏まえると、貧困世帯においては、ポイントの上昇程度は大きくはないものの、生理用品に関する剥奪経験が悪化していると考えられる。

なお、以上のような剥奪経験は、子どもの体験においても生じていると考えられる。文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」によれば、貧困世帯では、非貧困世帯にして、「海水浴やプールに行く」、「博物館・科学館・美術館などに行く」といった体験を「金銭的な理由」でできていない割合[5]が高いことが示されている。なお、同調査では、貧困世帯の子どもの剥奪経験をコロナ前／後で比較しており、コロナ後の方が剥奪経験をしている割合が高くなっているものの、その割合の差は 10 ポイントを超えていない（「キャンプやバーベキューに行く」＝拡大前 25.1%⇒拡大後 26.1%～「遊園地やテーマパークへ行く」＝拡大前 21.6%⇒拡大後 30.9%）。以上を踏まえると、公共料金等の剥奪同様、子どもの体験に関してもコロナ禍の前／後を問わず一貫して剥奪経験をしている貧困世帯が一定割合で存在していると考えられる。

[5] なお、貧困世帯は、「行かない・時間の制約」とする回答の割合もすべての項目において、非貧困世帯よりも高い傾向にある。ただし、そのポイント差は小さい（最大で「海水浴やプールに行く」＝全体調査 11.7%、事業利用者調査＝17.5%）。反対に、「金銭的な理由」や「時間の制約」以外の「その他の理由」により「行かない」としている割合は、すべての項目において非貧困世帯の方が高くなっている。

図表 12-17. 子どもの体験の剥奪（コロナ禍後・金銭的な理由を抜粋）

文京区「あなたのご家庭では、お子さんと次のような体験をしましたか。Ａ～Ｆそれぞれについて、ある場合は「１」に○を、ない場合はあてはまる理由を「２」～「４」（経済的理由／時間の制約／その他の理由）からそれぞれ１つずつに○を付けてください。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ-(b)	(a) Ⅱ-(b)
行かない・金銭的な理由（拡大後）	事業利用者調査		全体調査		
海水浴やプールに行く	18.6	-	1.7	16.9	-
博物館・科学館・美術館に行く	18.9	-	1.5	17.4	-
キャンプやバーベキューに行く	26.1	-	2.7	23.4	-
スポーツ観戦や劇場や映画館に行く	22.7	-	1.6	21.1	-
遊園地やテーマパークに行く	30.9	-	2.8	28.1	-
ファミリーレストラン等で外食をする	23.7	-	1.6	22.1	-

資料：文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」p.24 に基づき作成

（４）子どもの日常生活

①食生活

子どもの食生活に関して、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、コロナ禍前よりも「食事を抜く回数」が若干ではあるが増えている地域が見られる。他方で、一部の調査結果によれば、貧困世帯の中には、コロナ禍前よりも食生活が改善されているとみられる層があり、少なくとも「食事の回数」に限ってみれば、一概に「貧困世帯では食生活が悪化している」とは言い難い状況を示している。

まず、いくつかの調査では、子ども（福岡市調査のみ保護者）に対して、コロナ禍の影響で「食事を抜く回数（食事をしない回数）」が増えたか減ったかを質問している。これらの調査結果によれば、そもそも「食事を抜く回数」を「増えた」とする回答の割合が低く、なおかつ、地域間でのばらつきが大きい。例えば、長野市の貧困世帯では、「増えた」とする割合が 1.8%であるのに対して、沖縄県中２調査の同数値は 14.4%となっている。また、概して貧困世帯と非貧困世帯との間でのポイント差も小さい（図表 12-18）。なお、横浜市調査には「食事を抜く回数」について「そもそもない」という選択肢があり、特に小学５年生のいる世帯では、非貧困世帯（59.9%）の方が貧困世帯（47.3%）よりもこの選択をしている割合が高い。

また、図表では割愛しているが、「大田区子どもの生活実態調査」では、子どもに対して、コロナ禍前に比べて「朝・昼・夕と三食しっかり食べること」がどのように変化したかを質問している。同調査によれば、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、増えた（「とても増えた」＋「少し増えた」）の割合が高く、かつ、減った（「とても減った」＋「少し減った」の割合もまた高くなっている。つまり、貧困世帯では、コロナ禍前に比べて、「三食しっかり食べること」の機会が増えた層と、減った層の両方がいると考えられる。

この他、とりわけ、コロナ禍の学校休校期間中の昼食に焦点を当てた「佐賀県子どもの生活実態調査」では、子どもに対して「コロナウイルスの影響で学校が休みだったときの平日（月曜日～金曜日）に、あなたの昼食にどのようなものを一番多く食べていましたか」と質問している。調査結果では、概して、貧困世帯と非貧困世帯との間で大きな相違は見られなかったが、貧困世帯において若干「親が作ってくれたご飯を食べていた」の割合が低く（貧困世帯＝63.8%：非貧困世帯＝69.6%）、反対にわずかにではあるが「スーパーやコンビニで

買ってきたご飯を食べていた」（同 12.2%：10.3%）と「あまり食べていなかった」（同 2.8%：0.9%）の割合が高くなっている。

図表 12-18. 食事を抜く回数

米沢市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルスの感染拡大前と比べて、どのように変わったと思いますか。」／佐倉市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わったと思いますか。」／横浜市「新型コロナウイルス感染症の影響で、学校がお休みになる前（2020 年２月以前）と比べて、次のようなことは増えましたか、減りましたか。今の状況について教えてください。」／長野市「あなたの現在の生活で、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことはありますか。」／福岡市「お子さんの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」／長崎市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか」／沖縄県「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年２月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　食事を抜く回数	A世帯		B世帯		
増えた	3.5	－	2.7	0.8	－
減った	5.3	－	4.6	0.7	－
変わらない	90.3	－	90.6	(0.3)	－
無回答	0.9	－	2.1	(1.2)	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	10.1	5.9	5.7	4.4	0.2
減った	4.3	8.6	6.3	(2.0)	2.3
変わらない	84.1	85.2	86.1	(2.0)	(0.9)
無回答	1.4	0.3	1.9	(0.5)	(1.6)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	7.9	11.0	9.6	(1.7)	1.4
減った	5.3	7.0	4.7	0.6	2.3
変わらない	85.5	81.7	84.8	0.7	(3.1)
無回答	1.3	0.4	0.9	0.4	(0.5)
横浜市　同上（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	2.3	2.3	2.0	0.3	0.3
変わらない	45.0	38.6	33.7	11.3	4.9
減った	3.8	3.2	2.1	1.7	1.1
そもそもない	47.3	53.9	59.9	(12.6)	(6.0)
無回答	1.5	1.9	2.1	(0.6)	(0.2)
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	6.4	9.3	7.2	(0.8)	2.1
変わらない	43.6	44.9	40.1	3.5	4.8
減った	4.5	4.0	1.8	2.7	2.2
そもそもない	44.5	39.4	49.4	(4.9)	(10.0)
無回答	0.9	2.3	1.5	(0.6)	0.8
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	1.8	0.0	0.4	1.4	(0.4)
減った	0.0	2.5	1.6	(1.6)	0.9
変わらない	98.2	96.3	94.9	3.3	1.4
無回答	0.0	1.2	3.1	(3.1)	(1.9)
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	11.5	5.0	3.1	8.4	1.9
減った	3.7	1.9	1.6	2.1	0.3
変わらない	84.7	93.1	95.3	(10.6)	(2.2)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	2.5	－	2.1	0.4	－
減った	4.4	－	2.5	1.9	－
変わらない	91.3	－	92.6	(1.3)	－
無回答	1.9	－	2.8	(0.9)	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	9.4	－	6.0	3.4	－
減った	4.7	－	4.4	0.3	－
変わらない	80.5	－	87.1	(6.6)	－
無回答	5.5	－	2.5	3.0	－
沖縄県　同上（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	7.1	4.6	4.6	2.5	0.0
減った	10.2	9.1	7.3	2.9	1.8
変わらない	80.8	83.6	85.7	(4.9)	(2.1)
無回答	1.9	2.7	2.4	(0.5)	0.3
沖縄県　同上（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	14.4	11.9	12.0	2.4	(0.1)
減った	7.8	8.3	7.5	0.3	0.8
変わらない	75.7	77.8	79.1	(3.4)	(1.3)
無回答	2.0	2.0	1.4	0.6	0.6

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 193-94；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 77；「横浜市子どもの生活実態調査」p. 272；「長野市子どもの生活状況に関す

る実態調査」p. 197；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 60；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 131；「沖縄子ども調査」p. 142 に基づき作成

②睡眠

子どもの睡眠に関連する調査結果によれば、概ね貧困世帯の子どもの方が、非貧困世帯に比して、コロナ禍前よりも夜更かしの回数が増えている傾向が読み取れるものの、学校段階や地域によりばらつきが見られる。また、寝坊回数の増加や睡眠時間の減少に関しては、必ずしも貧困世帯の方が非貧困世帯よりも高い割合で経験しているとはいえない。

まず、コロナ禍前に比べて「夜遅くまで起きている回数」がどのように変化したかを質問した調査によれば、概して貧困世帯では、非貧困世帯に比して、夜更かしの回数が「増えた」とする割合が高く、「減った」や「変わらない」とする割合が低くなっている（図表 12-19）。ただし、一部の調査では、非貧困世帯の方が「増えた」とする割合が高く（佐倉市中２調査、長崎市中２調査）、また、ポイント差がほとんどない地域もある（佐倉市小５調査、沖縄県中２調査）。

これに対して、「四日市市子どもの生活実態調査」では、コロナ禍前に比べて「寝坊の回数」と「睡眠時間」がどのように変化したかを質問している。この点、いずれの項目に関しても「変わらない」とする割合が最も高くなっている。そのうえで、「寝坊の回数」に関して、小学５年生では、貧困世帯の方が非貧困世帯よりも「減った」とする割合が高く、反対に中学２年生では、貧困世帯の方が「増えた」とする割合が高い。他方で、「睡眠時間」に関しては、貧困世帯の方が非貧困世帯に比して「増えた」とする割合が高い。

図表 12-19. 夜遅くまで起きている回数

米沢市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルスの感染拡大前と比べて、どのように変わったと思いますか。」／佐倉市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わったと思いますか。」／横浜市「新型コロナウイルス感染症の影響で、学校がお休みになる前（2020 年２月以前）と比べて、次のようなことは増えましたか、減りましたか。今の状況について教えてください。」／長野市「あなたの現在の生活で、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことはありますか。」／福岡市「お子さんの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」／長崎市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか」／沖縄県「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年２月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　夜遅くまで起きている回数	A世帯		B世帯		
増えた	37.2	－	29.5	7.7	－
減った	4.4	－	5.7	(1.3)	－
変わらない	58.4	－	62.5	(4.1)	－
無回答	0.0	－	2.4	(2.4)	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	40.6	37.3	39.7	0.9	(2.4)
減った	11.6	12.4	9.7	1.9	2.7
変わらない	46.4	50.3	49.0	(2.6)	1.3
無回答	1.4	0.0	1.7	(0.3)	(1.7)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	36.8	52.0	52.7	(15.9)	(0.7)
減った	7.9	7.3	6.2	1.7	1.1
変わらない	53.9	40.3	40.5	13.4	(0.2)
無回答	1.3	0.4	0.6	0.7	(0.2)
横浜市　同上（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	42.7	31.0	32.8	9.9	(1.8)
変わらない	41.2	39.9	42.3	(1.1)	(2.4)
減った	6.1	7.2	4.9	1.2	2.3
そもそもない	8.4	19.7	17.9	(9.5)	1.8
無回答	1.5	2.1	2.1	(0.6)	0.0
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	45.5	46.7	41.9	3.6	4.8
変わらない	33.6	38.1	40.0	(6.4)	(1.9)
減った	6.4	3.0	4.8	1.6	(1.8)
そもそもない	13.6	9.8	11.6	2.0	(1.8)
無回答	0.9	2.3	1.7	(0.8)	0.6
長野市　同上 保護者	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	10.9	1.2	3.9	7.0	(2.7)
減った	3.6	2.5	3.1	0.5	(0.6)
変わらない	85.5	95.1	90.1	(4.6)	5.0
無回答	0.0	1.2	2.9	(2.9)	(1.7)
福岡市　同上　保護者	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	59.0	49.6	43.9	15.1	5.7
減った	1.4	0.8	1.0	0.4	(0.2)
変わらない	39.5	49.7	55.1	(15.6)	(5.4)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	29.4	－	22.8	6.6	－
減った	9.4	－	7.9	1.5	－
変わらない	59.4	－	66.6	(7.2)	－
無回答	1.9	－	2.7	(0.8)	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	25.8	－	32.5	(6.7)	－
減った	7.8	－	4.7	3.1	－
変わらない	60.9	－	60.3	0.6	－
無回答	5.5	－	2.6	2.9	－
沖縄県　同上（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	41.7	37.0	34.2	7.5	2.8
減った	12.1	11.6	11.2	0.9	0.4
変わらない	44.3	49.5	51.9	(7.6)	(2.4)
無回答	1.9	1.9	2.8	(0.9)	(0.9)
沖縄県　同上（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	52.5	49.1	51.5	1.0	(2.4)
減った	7.1	6.3	4.8	2.3	1.5
変わらない	38.9	42.6	42.3	(3.4)	0.3
無回答	1.5	2.0	1.4	0.1	0.6

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 193-94；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 78；「横浜市子どもの生活実態調査」p. 273；「長野市子どもの生活状況に関す

る実態調査」p. 198；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 61；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 132；「沖縄子ども調査」p. 144 に基づき作成

図表 12-20. 寝坊の回数と睡眠時間

四日市市「新型コロナウイルス感染症が流行する前と比べて、下のことについて変化がありましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
寝坊の回数（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	18.9	17.9	16.1	2.8	1.8
減った	21.4	17.0	14.3	7.1	2.7
変わらない	56.3	62.9	68.2	(11.9)	(5.3)
不明・無回答	3.4	2.2	1.4	2.0	0.8
同上（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	25.0	20.9	18.9	6.1	2.0
減った	10.3	9.7	7.5	2.8	2.2
変わらない	64.7	69.0	73.2	(8.5)	(4.2)
不明・無回答	0.0	0.4	0.4	(0.4)	0.0
睡眠時間（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	21.4	19.5	15.8	5.6	3.7
減った	20.4	18.1	20.1	0.3	(2.0)
変わらない	56.3	60.6	62.7	(6.4)	(2.1)
不明・無回答	1.9	1.8	1.4	0.5	0.4
同上（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	18.3	15.5	13.9	4.4	1.6
減った	33.5	38.6	35.7	(2.2)	2.9
変わらない	47.8	45.5	49.8	(2.0)	(4.3)
不明・無回答	0.4	0.4	0.6	(0.2)	(0.2)

資料：「四日市市子どもの生活実態調査」pp. 17-18 に基づき作成

（５）精神状態

以下では、コロナ禍が貧困世帯の保護者・子どもの精神状態に及ぼした影響に着目する。調査結果からは、①貧困世帯の保護者の方が、非貧困世帯に比して、コロナ禍による精神状態への影響（イライラ、不安、気分の沈む経験）が大きいことが示されている一方、②子どもの精神状態に関しては、概ね同様の傾向が見られるものの、必ずしも貧困世帯と非貧困世帯の間の相違が大きくはないことが示されている。

まず、保護者の精神状態に関しては、一部の調査においてコロナ禍で「あなた自身がイライラや不安を感じたり、気分が沈むこと」がどう変化したかを質問している。これらの調査によれば、概ね貧困世帯の方が、非貧困世帯に比して、「イライラや不安を感じたり、気分が沈むこと」が増えたとする割合が高い（図表 12-21）。ただし、その割合は、２割程度（長野市調査）から５割弱（福井県小５調査、福岡市調査）まで幅があり、非貧困世帯とのポイント差に関しても 7.7（長崎市調査）から 26.5（福井県中２調査）まで幅がある。

図表 12-21. 保護者のイライラや不安状態

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／福井県「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）		
	Ⅰ	Ⅱ		(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　あなた自身がイライラや不安を感じたり、気分が沈むこと	A世帯		B世帯		
増えた	38.5	－	34.5	4.0	－
減った	1.4	－	1.8	(0.4)	－
変わらない	58.0	－	62.2	(4.2)	－
無回答	2.1	－	1.6	0.5	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	43.7	35.2	30.2	13.5	5.0
減った	2.8	2.9	4.3	(1.5)	(1.4)
変わらない	53.5	61.0	65.1	(11.6)	(4.1)
無回答	0.0	0.9	0.4	(0.4)	0.5
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	48.8	36.1	28.6	20.2	7.5
減った	3.7	3.6	2.5	1.2	1.1
変わらない	47.6	60.3	68.7	(21.1)	(8.4)
無回答	0.0	0.0	0.2	(0.2)	(0.2)
福井県　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	49.3	32.6	25.7	23.6	6.9
減った	0.0	2.8	2.7	(2.7)	0.1
変わらない	50.7	64.6	71.7	(21.0)	(7.1)
福井県　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	36.0	34.1	9.5	26.5	24.6
減った	5.3	0.6	3.8	1.5	(3.2)
変わらない	58.7	65.3	86.8	(28.1)	(21.5)
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	21.7	16.6	8.2	13.5	8.4
減った	0.0	0.5	0.2	(0.2)	0.3
変わらない	76.7	81.8	90.8	(14.1)	(9.0)
無回答	1.6	1.1	0.8	0.8	0.3
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	49.2	39.8	31.4	17.8	8.4
減った	4.3	2.7	3.2	1.1	(0.5)
変わらない	46.5	57.5	65.4	(18.9)	(7.9)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	36.0	－	28.3	7.7	－
減った	4.3	－	1.8	2.5	－
変わらない	56.5	－	68.8	(12.3)	－
無回答	3.1	－	1.1	2.0	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	40.3	－	28.9	11.4	－
減った	0.8	－	1.5	(0.7)	－
変わらない	53.5	－	68.1	(14.6)	－
無回答	5.4	－	1.4	4.0	－

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 175；「福井県子どもの生活状況調査」p. 10；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 104；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 54；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 60 に基づき作成

同様に、一部の調査では、子どもに対して、コロナ禍の前／後で自身の精神状態（イライラ、不安等）がどのように変化したかを質問している（図表 12-22）。これらの調査によれば、貧困世帯においてコロナ禍後に「イライラや不安を感じたり、気分が沈むこと」が「増えた」とする割合と、非貧困世帯の同割合のポイント差が 10 を超える地域（長野市調査、福岡市調査）がある一方で、非貧困世帯の方が「増えた」とする割合がわずかに高い地域（長崎市中２調査、沖縄県中２調査）がある。

子どもの精神状態と関連して、異なる調査項目を設定している調査もある。大田区では、保護者を対象にコロナ禍（「臨時休校・休業」）後に子どもが「落ち込んだ」、「不安を感じていた」、「寂しそうだった」、「イライラしていた」のかを質問しており（「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」）、他方で子ども自身に対してもコロナ禍前／後で「不安だったこと」、「さみしいと感じたこと」がどのように変化したかを質問している（「大田区子どもの生活実態調査」）。図表は割愛しているが、上記いずれの調査項目に関しても、貧困世帯の方が、非貧困世帯に比して該当する（「とてもそう思う」＋「そう思う」）、または、増加した（「とても増えた」＋「少し増えた」）する割合が高くなっている。ただし、いずれの項目に関しても、貧困世帯と非貧困世帯との間のポイント差は小さく、10 ポイントを上回るものはない。

これに対して、「横浜市子どもの生活実態調査」によれば、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、子どもがコロナ禍前に比べて「甘えたがる」、「イライラしている」、「落ち込んでいる」とする割合（「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」）が高く、概ね 10 ポイント以上の差がある（図表 12-23）。なお、図表では割愛しているが、同調査では、子ども自身を対象にコロナ禍前に比して「イライラや不安を感じたり、気分がしずむこと」や「さみしいと思うこと」が増えたか否かを質問しているが、いずれの項目に関しても「増えた」とする割合は、貧困世帯と非貧困世帯の間でほとんど変わらない（最大でも３ポイント程度の差）。ただし、小学５年生の「さみしいと思うこと」に関しては、貧困世帯（所得区分 1）で「変わらない」が 45.8%、「そもそもない」が 32.1%であったのに対して、非貧困世帯では同数値がそれぞれ 35.4%、43.0%となっており、貧困世帯の小学生に限ってはコロナ禍の前／後を問わず「さみしい」思いをしている割合の高いことがうかがえる。

最後に「四日市市子どもの生活実態調査」では、子どもに対してコロナ禍前に比べ「何となく不安に感じること」、「楽しいと感じる時間」、「楽しめない時間」がどう変化したかを質問している。「何となく不安に感じること」に関しては、これまでの調査でも取り扱われており、四日市市調査でも同様の傾向が見られたため図表では割愛している。ここで特に留意すべきは、「楽しめない時間」に関して、貧困世帯の小学５年生は、非貧困世帯に比して、「楽しめない時間」が「増えた」とする割合が高くなっている一方で、中学２年生に限っては、貧困世帯の方が「楽しめない時間」が「減った」とする割合が高くなっていることである。

図表 12-22. 子どものイライラや不安状態

米沢市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルスの感染拡大前と比べて、どのように変わったと思いますか。」／佐倉市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わったと思いますか。」／長野市「あなたの現在の生活で、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことはありますか。」／福岡市「お子さんの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」／長崎市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか」／沖縄県「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年２月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
	Ⅰ	Ⅱ			
米沢市　イライラや不安を感じたり、気分が沈むこと	A世帯		B世帯		
増えた	29.2	－	24.5	4.7	－
減った	14.2	－	11.6	2.6	－
変わらない	55.8	－	61.5	(5.7)	－
無回答	0.9	－	2.4	(1.5)	－
	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
	Ⅰ	Ⅱ			
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	44.9	38.8	35.7	9.2	3.1
減った	18.8	14.5	16.1	2.7	(1.6)
変わらない	34.8	46.2	47.2	(12.4)	(1.0)
無回答	1.4	0.6	0.9	0.5	(0.3)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	46.1	41.8	37.9	8.2	3.9
減った	14.5	9.5	8.1	6.4	1.4
変わらない	38.2	48.7	53.5	(15.3)	(4.8)
無回答	1.3	0.0	0.4	0.9	(0.4)
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	36.4	23.5	25.3	11.1	(1.8)
減った	3.6	9.9	4.5	(0.9)	5.4
変わらない	58.2	65.4	68.2	(10.0)	(2.8)
無回答	1.8	1.2	1.9	(0.1)	(0.7)
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	37.8	29.9	25.1	12.7	4.8
減った	2.7	1.9	1.5	1.2	0.4
変わらない	59.5	68.3	73.4	(13.9)	(5.1)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	23.1	－	22.7	0.4	－
減った	13.8	－	10.5	3.3	－
変わらない	62.5	－	64.4	(1.9)	－
無回答	0.6	－	2.3	(1.7)	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	28.9	－	29.2	(0.3)	－
減った	7.0	－	6.4	0.6	－
変わらない	57.8	－	62.1	(4.3)	－
無回答	6.3	－	2.3	4.0	－
沖縄県　同上（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	35.2	33.7	32.9	2.3	0.8
減った	17.3	17.0	15.5	1.8	1.5
変わらない	46.0	47.1	49.3	(3.3)	(2.2)
無回答	1.5	2.2	2.3	(0.8)	(0.1)
沖縄県　同上（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	34.9	36.6	37.9	(3.0)	(1.3)
減った	10.0	8.5	8.3	1.7	0.2
変わらない	53.8	52.9	52.0	1.8	0.9
無回答	1.4	2.0	1.8	(0.4)	0.2

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 193-94；「佐倉市子どもの生活状況調査」p. 80；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 208；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 63；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 134；「沖縄子ども調査」p. 148 に基づき作成

図表 12-23. 子どもが甘えたがる／イライラしている／落ち込んでいる

横浜市「宛名のお子さんやあなたの現在の様子について、新型コロナウイルス感染症拡大前の2020 年１月頃と比べて、次のようなことはどれくらい当てはまりますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
横浜市　甘えたがる（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	14.7	12.3	6.6	8.1	5.7
どちらかといえばあてはまる	26.5	18.8	18.3	8.2	0.5
どちらかといえばあてはまらない	20.6	23.1	17.1	3.5	6.0
あてはまらない	36.0	45.0	56.5	(20.5)	(11.5)
無回答	2.2	0.8	1.4	0.8	(0.6)
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	5.0	6.0	2.9	2.1	3.1
どちらかといえばあてはまる	20.2	14.8	11.6	8.6	3.2
どちらかといえばあてはまらない	22.7	19.1	17.7	5.0	1.4
あてはまらない	50.4	57.7	67.0	(16.6)	(9.3)
無回答	1.7	2.4	0.7	1.0	1.7
横浜市　イライラしている（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	13.2	9.2	6.1	7.1	3.1
どちらかといえばあてはまる	25.7	21.5	18.2	7.5	3.3
どちらかといえばあてはまらない	24.3	23.7	19.1	5.2	4.6
あてはまらない	36.0	44.2	55.5	(19.5)	(11.3)
無回答	0.7	1.4	1.2	(0.5)	0.2
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	16.8	10.3	4.6	12.2	5.7
どちらかといえばあてはまる	26.1	24.9	19.8	6.3	5.1
どちらかといえばあてはまらない	24.4	22.2	22.6	1.8	(0.4)
あてはまらない	31.9	40.7	52.6	(20.7)	(11.9)
無回答	0.8	1.9	0.4	0.4	1.5
横浜市　落ち込んでいる（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	6.6	1.6	1.4	5.2	0.2
どちらかといえばあてはまる	6.6	8.8	6.0	0.6	2.8
どちらかといえばあてはまらない	32.4	27.6	19.5	12.9	8.1
あてはまらない	53.7	60.9	71.8	(18.1)	(10.9)
無回答	0.7	1.0	1.3	(0.6)	(0.3)
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	7.6	3.6	2.0	5.6	1.6
どちらかといえばあてはまる	14.3	12.2	5.9	8.4	6.3
どちらかといえばあてはまらない	31.9	26.3	24.1	7.8	2.2
あてはまらない	45.4	55.0	67.5	(22.1)	(12.5)
無回答	0.8	2.9	0.4	0.4	2.5

資料：「横浜市子どもの生活実態調査」pp. 105-111 に基づき作成

図表 12-24. 楽しい／楽しめない時間

四日市市「新型コロナウイルス感染症が流行する前と比べて、下のことについて変化がありましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
四日市市　楽しいと感じる時間（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	45.1	48.1	45.2	(0.1)	2.9
減った	23.3	17.8	19.0	4.3	(1.2)
変わらない	29.1	32.1	34.9	(5.8)	(2.8)
不明・無回答	2.4	2.1	1.0	1.4	1.1
四日市市　楽しいと感じる時間（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	47.3	43.6	43.9	3.4	(0.3)
減った	23.7	21.2	19.2	4.5	2.0
変わらない	29.0	34.8	36.6	(7.6)	(1.8)
不明・無回答	0.0	0.4	0.4	(0.4)	0.0
四日市市　楽しめない時間（小5）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	29.1	18.1	20.7	8.4	(2.6)
減った	26.2	34.2	28.1	(1.9)	6.1
変わらない	43.2	45.7	49.9	(6.7)	(4.2)
不明・無回答	1.5	1.9	1.4	0.1	0.5
四日市市　楽しめない時間（中2）	所得区分Ⅲ	所得区分Ⅱ	所得区分Ⅰ		
増えた	24.6	26.7	24.3	0.3	2.4
減った	28.6	17.8	16.8	11.8	1.0
変わらない	46.9	55.1	58.3	(11.4)	(3.2)
不明・無回答	0.0	0.4	0.6	(0.6)	(0.2)

資料：「四日市市子どもの生活実態調査」pp. 22-23 に基づき作成

（６）家族内での人間関係

①親子の時間

まず、家族内特に親子の会話に関して確認すると、一部の調査では、保護者に対して、コロナ禍の前／後で「お子さんと話をすること」がどのように変化したかを質問している。これらの調査結果によれば、貧困世帯か否かを問わず「変わらない」とする割合が最も高く、順に「増えた」、「減った」がそれに続いている（図表 12-25）。なお、概して非貧困世帯の方が、貧困世帯に比して「変わらない」とする割合が高いものの、「増えた」と「減った」に関しては、地域や学校段階によってばらつきがある。

以上と同様に、「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」では、保護者に対して、コロナ禍（公立学校の「臨時休業」）により子どもと「過ごす時間が増えた」のか、あるいはまた、子どもと「話す時間が増えた」のかを質問している。同調査によれば、貧困世帯では、保護者が子どもと「過ごす時間」、または「話す時間」が増えたと見なしている割合（「とてもそう思う」＋「そう思う」）が、非貧困世帯に比して低く、反対に増えたとは思えない（「全くそう思わない」＋「あまりそう思わない」）とする割合が高い（図表 12-26）。とりわけ、ひとり親世帯においては、子どもと「過ごす時間」、または「話す時間」が増えたと見なしている割合（「とてもそう思う」＋「そう思う」）が、非貧困世帯よりも約 20 ポイント低くなっている。

図表 12-25. 子どもと話すこと

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　お子さんと話をすること	A世帯		B世帯		
増えた	30.1	－	25.8	4.3	－
減った	3.5	－	1.3	2.2	－
変わらない	63.6	－	71.2	(7.6)	－
無回答	2.8	－	1.6	1.2	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	32.4	34.6	33.4	(1.0)	1.2
減った	2.8	2.6	1.3	1.5	1.3
変わらない	64.8	61.9	64.9	(0.1)	(3.0)
無回答	0.0	0.9	0.4	(0.4)	0.5
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	36.6	32.5	30.7	5.9	1.8
減った	6.1	4.3	2.5	3.6	1.8
変わらない	57.3	62.8	66.6	(9.3)	(3.8)
無回答	0.0	0.4	0.2	(0.2)	0.2
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	1.6	0.5	1.5	0.1	(1.0)
減った	14.7	10.7	2.1	12.6	8.6
変わらない	82.9	87.7	95.6	(12.7)	(7.9)
無回答	0.8	1.1	0.8	0.0	0.3
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	30.7	27.4	27.8	2.9	(0.4)
減った	8.0	4.1	2.1	5.9	2.0
変わらない	61.3	68.5	70.1	(8.8)	(1.6)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	23.0	－	24.0	(1.0)	－
減った	4.3	－	1.7	2.6	－
変わらない	70.8	－	73.2	(2.4)	－
無回答	1.9	－	1.1	0.8	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	21.7	－	18.2	3.5	－
減った	5.4	－	2.6	2.8	－
変わらない	69.0	－	77.6	(8.6)	－
無回答	3.9	－	1.6	2.3	－

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 173；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 99；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 52；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 58 に基づき作成

図表 12-26. 子どもと過ごす時間

大田区「大田区においては、３月から５月末まで、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、公立小学校は臨時休業となりました。これによるお子さんへの影響にはどのようなものがありましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
大田区　お子さんと過ごす時間が増えた	生活困難層		非生活困難層		
とてもそう思う	46.2	－	50.7	(4.5)	－
そう思う	23.0	－	30.2	(7.2)	－
どちらともいえない	14.6	－	8.8	5.8	－
あまりそう思わない	7.9	－	5.5	2.4	－
全くそう思わない	7.2	－	4.2	3.0	－
無回答	1.2	－	0.6	0.6	－
大田区　ひとり親調査（同上）	ひとり親世帯		再掲		
とてもそう思う	31.8	－	50.7	(18.9)	－
そう思う	28.5	－	30.2	(1.7)	－
どちらともいえない	15.2	－	8.8	6.4	－
あまりそう思わない	10.8	－	5.5	5.3	－
全くそう思わない	11.5	－	4.2	7.3	－
無回答	2.3	－	0.6	1.7	－
大田区　お子さんと話す時間が増えた					
とてもそう思う	33.7	－	35.6	(1.9)	－
そう思う	30.1	－	36.8	(6.7)	－
どちらともいえない	23.4	－	18.4	5.0	－
あまりそう思わない	6.2	－	5.7	0.5	－
全くそう思わない	5.0	－	2.7	2.3	－
無回答	1.4	－	0.7	0.7	－
大田区　ひとり親調査（同上）	ひとり親世帯		再掲		
とてもそう思う	23.0	－	35.6	(12.6)	－
そう思う	31.1	－	36.8	(5.7)	－
どちらともいえない	23.4	－	18.4	5.0	－
あまりそう思わない	10.9	－	5.7	5.2	－
全くそう思わない	9.0	－	2.7	6.3	－
無回答	2.6	－	0.7	1.9	－

資料:「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」pp. 50・259 に基づき作成

②親子間の葛藤

一部の調査では、コロナ禍の影響で親子間での葛藤（怒鳴る、手をあげる等）が生じているかを質問している。いずれも保護者に対する質問として「子どもに厳しく怒ったり叱った」、「子どもから強い反抗的な態度をされた」（文京区調査）、「お子さんをたたいてしまうことがある」、「お子さんを感情的に怒鳴ってしまうことがある」（横浜市調査）、「お子さんに手をあげたり、きつくしかったりした」（大田区調査）が設定されている。

いずれの調査に関しても、貧困世帯の方が、非貧困世帯に比して、上記の状況に該当する割合が高くなっている（図表 12-27）。ただし、暴力が関わる調査項目（「たたいてしまう」、「手をあげたり」）に関しては、貧困世帯か否かを問わず該当するとした割合が低く、貧困世帯と非貧困世帯との間のポイント差もわずかである。また、留意すべき点として、「横浜市子どもの生活実態調査」の「お子さんを感情的に怒鳴ってしまうことがある」に関して、中学２年生の保護者において「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」が４割弱を占めており、非貧困世帯との差が約 16 ポイントと大きいことである。

図表 12-27. 親子間の葛藤

文教区「新型コロナウイルス感染症による影響について、それぞれあてはまるもの１つずつに○をつけてください。」／「大田区においては、３月から５月末まで、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、公立小学校は臨時休業となりました。これによるお子さんへの影響にはどのようなものがありましたか。」／横浜市「宛名のお子さんやあなたの現在の様子について、新型コロナウイルス感染症拡大前の2020 年１月頃と比べて、次のようなことはどれくらい当てはまりますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
文京区　子どもに厳しく怒ったり叱った	事業利用者調査		全体調査		
あてはまる	25.1	－	16.1	9.0	－
どちらともいえない	17.9	－	17.5	0.4	－
あてはまらない	45.0	－	59.4	(14.4)	－
無回答	12.0	－	7.1	4.9	－
文教区 子どもから強い反抗的な態度をされた					
あてはまる	24.4	16.1	16.1	8.3	－
どちらともいえない	15.1	13.5	17.5	(2.4)	－
あてはまらない	48.5	63.4	59.4	(10.9)	－
無回答	12.0	7.1	7.1	4.9	－
大田区　お子さんに手をあげたり、きつくしかったりした	生活困難層		非生活困難層		
とてもそう思う	4.1	－	1.8	2.3	－
そう思う	13.2	－	11.4	1.8	－
どちらともいえない	17.5	－	19.8	(2.3)	－
あまりそう思わない	24.9	－	29.1	(4.2)	－
全くそう思わない	39.0	－	37.1	1.9	－
無回答	1.4	－	0.7	0.7	－
大田区　ひとり親調査（同上）	ひとり親世帯		再掲		
とてもそう思う	2.6	－	1.8	0.8	－
そう思う	10.8	－	11.4	(0.6)	－
どちらともいえない	16.3	－	19.8	(3.5)	－
あまりそう思わない	22.7	－	29.1	(6.4)	－
全くそう思わない	45.6	－	37.1	8.5	－
無回答	2.1	－	0.7	1.4	－
横浜市　（小5） お子さんをたたいてしまうことがある	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	3.7	1.8	1.0	2.7	0.8
どちらかといえばあてはまる	10.3	8.2	6.1	4.2	2.1
どちらかといえばあてはまらない	15.4	14.5	10.5	4.9	4.0
あてはまらない	69.9	74.2	81.4	(11.5)	(7.2)
無回答	0.7	1.2	1.0	(0.3)	0.2
横浜市　同（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	3.4	1.4	0.7	2.7	0.7
どちらかといえばあてはまる	5.9	3.6	2.2	3.7	1.4
どちらかといえばあてはまらない	10.1	9.6	8.6	1.5	1.0
あてはまらない	79.8	83.3	88.0	(8.2)	(4.7)
無回答	0.8	2.2	0.4	0.4	1.8
横浜市　（小5）お子さんを感情的に怒鳴ってしまうことがある	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	14.0	10.6	6.3	7.7	4.3
どちらかといえばあてはまる	25.7	27.8	22.1	3.6	5.7
どちらかといえばあてはまらない	26.5	25.2	22.9	3.6	2.3
あてはまらない	33.1	35.4	47.7	(14.6)	(12.3)
無回答	0.7	1.0	1.1	(0.4)	(0.1)
横浜市　同（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	20.2	8.6	4.1	16.1	4.5
どちらかといえばあてはまる	18.5	17.9	16.4	2.1	1.5
どちらかといえばあてはまらない	17.6	25.1	21.2	(3.6)	3.9
あてはまらない	42.9	45.9	57.8	(14.9)	(11.9)
無回答	0.8	2.4	0.5	0.3	1.9

資料：文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」p.19；資料：「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」p. 51・260；「横浜市子どもの生活実態調査」pp. 120-123 に基づき作成

他方で、図表は割愛しているが、「大田区子どもの生活実態調査」（p.　167）、ならびに、「横浜市子どもの生活実態調査」（p. 270）では、子どもに対して、コロナ禍前に比べて「親にしかられること」が増えたかどうかが質問されている。この点、「増えた」とする割合は２～３割程度で、なおかつ、貧困世帯と非貧困世帯との間でほとんどポイント差はない。したがって、少なくとも子どもの視点では、とりわけ貧困世帯において「親にしかられる」経験が増加しているとは言えないだろう。

なお、同じく「大田区子どもの生活実態調査」（p.167）では、同様に子どもに対して、コロナ改善に比べて「親にほめられること」が増えたか否かを質問しているが、増えた（「とても増えた」＋「少し増えた」）とする割合は、貧困世帯と非貧困世帯共に３割程度でポイント差はほとんどない。また、同経験が減った（「とても減った」＋「少し減った」）とする割合は、両世帯とも１割弱でポイント差はわずかである。

③家族内でのトラブル・葛藤

最後に、より広くコロナ禍によって生じたと考えられる家族内でのもめごと（言い争い、家族同士の関係性の悪化、暴力等）に関する調査結果を見ていく。いくつかの調査では、保護者に対してコロナ禍により「家庭内で言い争ったり、もめごとが起きること」がどのように変化したかを質問している（図表 12-28）。これらの調査結果によれば、概ね貧困世帯の方が非貧困世帯よりも言い争いやもめごとが「増えた」とする割合が高い。ただし、非貧困世帯の方が貧困世帯よりも同割合がわずかに高くなっている調査結果（米沢市調査、長崎市小５調査）がある。また、学校段階別に集計している調査では、小学５年生の保護者の方が中学２年生の保護者よりも同割合を高く回答している調査結果（佐倉市調査）がある一方で、反対の結果を示す調査（長崎市調査）もある。

また、文京区「文京区子どもの生活状況調査」及び「事業利用者調査」では、保護者に対して「新型コロナウイルス感染症による影響」として、当てはまる項目を選択するよう求めている。図表は割愛しているが、このうち「夫婦・パートナーとの関係が悪化した」に関しては、事業利用者調査で「あてはまる」が 11.7%、全体調査では 10.7%となっており、この選択肢を選んでいる割合は低く、なおかつ貧困世帯と非貧困世帯との間のポイント差もわずかである。

以上に対して、より子どもに焦点化した調査項目を設定した調査もある。大田区の「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」では、コロナ禍による「公立学校の臨時休業」が子どもに及ぼした影響として、「家庭内でのストレスが高まった」のか、あるいは「家庭内で暴力が増えた」のかを調べている。ここで「とてもそう思う」と「そう思う」の割合の合計に着目すると、ストレスの高まりを経験している割合が、暴力の増加を経験している割合よりも高いことがわかる一方、いずれの項目についても貧困世帯（ひとり親世帯含む）と非貧困世帯との間のポイント差は大きくない。

図表 12-28. 家庭内での言い争い・もめごと

米沢市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前から比べて、どのように変わりましたか。」／佐倉市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わりましたか。」／長野市「あなたのご家庭の現在の生活は、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変化はありましたか。」／福岡市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか。」／長崎市「あなたのご家庭の現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）から比べて、どのように変わりましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）		
	Ⅰ	Ⅱ		(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　家庭内で言い争ったり、もめごとが起こること	A世帯		B世帯		
増えた	12.6	－	14.0	(1.4)	－
減った	4.9	－	2.2	2.7	－
変わらない	79.7	－	82.2	(2.5)	－
無回答	2.8	－	1.6	1.2	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	29.6	16.7	14.6	15.0	2.1
減った	5.6	66.7	6.2	(0.6)	60.5
変わらない	64.8	75.7	78.6	(13.8)	(2.9)
無回答	0.0	0.9	0.6	(0.6)	0.3
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	24.4	15.5	12.8	11.6	2.7
減った	7.3	7.2	4.6	2.7	2.6
変わらない	68.3	77.3	82.1	(13.8)	(4.8)
無回答	0.0	0.0	0.4	(0.4)	(0.4)
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	9.3	4.3	1.4	7.9	2.9
減った	0.8	1.1	0.8	0.0	0.3
変わらない	88.4	93.6	96.8	(8.4)	(3.2)
無回答	1.6	1.6	1.0	0.6	0.6
福岡市　同上	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	23.5	18.5	13.6	9.9	4.9
減った	5.9	3.5	4.4	1.5	(0.9)
変わらない	70.6	78.0	82.1	(11.5)	(4.1)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	9.3	－	9.4	(0.1)	－
減った	7.7	－	3.9	3.8	－
変わらない	80.1	－	84.9	(4.8)	－
無回答	3.1	－	1.7	1.4	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	13.2	－	8.2	5.0	－
減った	5.4	－	3.9	1.5	－
変わらない	76.0	－	86.1	(10.1)	－
無回答	5.4	－	1.8	3.6	－

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 77-78；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 174；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 103；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」p. 53；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 59 に基づき作成

図表 12-29. 家庭内でのストレス／暴力の高まり

大田区「大田区においては、３月から５月末まで、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、公立小学校は臨時休業となりました。これによるお子さんへの影響にはどのようなものがありましたか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
家庭内でストレスが高まった	生活困難層		非生活困難層		
とてもそう思う	14.6	－	11.1	3.5	－
そう思う	26.1	－	28.0	(1.9)	－
どちらともいえない	21.1	－	19.5	1.6	－
あまりそう思わない	16.0	－	22.8	(6.8)	－
全くそう思わない	21.3	－	18.0	3.3	－
無回答	1.0	－	0.5	0.5	－
家庭内で暴力が増えた	生活困難層		非生活困難層		
とてもそう思う	0.5	－	0.4	0.1	－
そう思う	1.9	－	2.4	(0.5)	－
どちらともいえない	12.4	－	6.3	6.1	－
あまりそう思わない	15.3	－	15.9	(0.6)	－
全くそう思わない	68.7	－	74.3	(5.6)	－
無回答	1.2	－	0.6	0.6	－
家庭内でストレスが高まった	ひとり親調査		再掲		
とてもそう思う	14.8	－	11.1	3.7	－
そう思う	23.4	－	28.0	(4.6)	－
どちらともいえない	18.5	－	19.5	(1.0)	－
あまりそう思わない	17.2	－	22.8	(5.6)	－
全くそう思わない	24.0	－	18.0	6.0	－
無回答	2.1	－	0.5	1.6	－
家庭内で暴力が増えた	ひとり親調査		再掲		
とてもそう思う	0.9	－	0.4	0.5	－
そう思う	1.7	－	2.4	(0.7)	－
どちらともいえない	7.2	－	6.3	0.9	－
あまりそう思わない	12.2	－	15.9	(3.7)	－
全くそう思わない	75.6	－	74.3	1.3	－
無回答	2.4	－	0.6	1.8	－

資料:「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」pp. 51-52・260-261 に基づき作成

他方で、「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」では、子ども自身に対して「新型コロナウイルスや外出を控えている影響で、家族との仲がぎくしゃくした」かどうかを質問している。図表は割愛しているが、「とてもあてはまる」＋「まあまああてはまる」とする割合の合計に関して、貧困世帯と非貧困世帯との間で大きなポイント差はみられない（困窮度 1＝8.4%、困窮度 2＝6.8%、中央値以上＝6.1%）。

また、同じく図表は示していないが、「武雄市子どもの生活実態調査」では、コロナ禍の子どもに及ぼした影響が問われており、その選択肢の一つとして「家族との関係が悪くなったこと」が示されているが、貧困世帯（困難度が高い世帯）では 3.9%、非貧困世帯（それ以外の世帯）では 1.5%と、いずれの世帯においてもその選択された割合は低い。

（７）子どもの学び

ここでは、子どもの学び（学校内外での勉強）に着目する。まず、関連する調査結果によれば、貧困世帯の子どもは、コロナ禍以前に比べて、非貧困世帯よりも学校外での勉強時間が減っている（少なくとも増えてはいない）傾向にあり、とりわけ「学校の授業がわからないと感じる」割合が高いと考えられる。そして、これらの子どもの学びに関する課題は、貧困世帯・非貧困世帯を問わず、当事者である保護者・子どもにとって懸念材料となっていると考えられる。ただし、その他の困りごと（生活リズムの乱れ等）もまた重要であり、コロ

ナ禍による影響が子どもの学びに限られないことが示されている。

①学校外での勉強時間

まず、子どもの学校外での勉強時間に着目する。いくつかの調査では、子ども（福岡市調査に限り保護者）に対して、コロナ以前に比べて「学校の授業以外で勉強する時間」がどのように変化したかを質問している。この点について、概して貧困世帯では、非貧困世帯に比して、勉強時間が「増えた」とする割合が低く、反対に「減った」とする割合が高い（図表12-30）。ただし、具体的な割合や、貧困世帯と非貧困世帯との間のポイント差は、地域・学校段階によりばらつきがある。また、学校段階が区別されている調査を見る限り、貧困世帯か否かを問わず、概ね中学生の方が小学生よりも「増えた」とする割合が高くなっている。なお、図表にまとめてはいないが、「武雄市子どもの生活実態調査」では、貧困世帯の子どもは、非貧困世帯に比して、「勉強をする時間が増えた」とする割合の低いことが示されている（p. 100）。ただし、そのポイント差（貧困世帯＝12.7%：非貧困世帯＝18.7%）はあまり大きくない。

上記と関連して、「日野市子どもの生活実態調査」では、子どもに対して「コロナで学校が休みの時の平日の過ごし方」を複数選択式で質問している。ここでは、学校段階ごとに分け、貧困世帯（貧困Ｉ＝困窮層）が最も高い割合で選択した３項目と、勉強に関連する３項目を抽出して図表 12-31 にまとめている。概して、貧困世帯では、非貧困世帯に比して、娯楽的な時間の過ごし方（「ゲームをする」、「テレビや動画を視る」、「音楽を聴く、歌う」）を選択している割合が高く、非貧困世帯とのポイント差も大きい。反対に貧困世帯の小学５年生は、「学校の宿題をする」、「塾など学校以外の勉強をする」を選択している割合が低く、同じく中学２年生は、「塾など学校以外の勉強をする」を選択している割合が低い。ただし、「スマホやパソコンで勉強をする」や「学校の宿題をする」に関しては、貧困世帯の方が高い割合で選択しており、とりわけ中学生では、学校外での学びに関して非貧困世帯との差が大きくなっているものと考えられる。

同様に「佐賀県子どもの生活実態調査」では、子どもに対して「コロナ禍における休校中の過ごし方」を複数選択式で質問している。同調査の結果は、概ね日野市調査と同様の傾向を示しているものの、娯楽的な時間の過ごし方に関する貧困世帯と非貧困世帯の差はあまり見られず、とりわけ、「塾の勉強をする」を選択する割合及び世帯間のポイント差も相対的に低い（小さい）ことに留意が必要である。質問項目が異なるため厳密な比較にはならないが、「塾での勉強」に関する地域差によるものと考えられる。

図表 12-30. 学校の授業以外で勉強する時間

米沢市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルスの感染拡大前と比べて、どのように変わったと思いますか。」／佐倉市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わったと思いますか。」／「新型コロナウイルス感染症の影響で、学校がお休みになる前（2020 年2月以前）と比べて、次のようなことは増えましたか、減りましたか。今の状況について教えてください。」／長野市「あなたの現在の生活で、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことはありますか。」／福岡市「お子さんの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」／長崎市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか」／沖縄県「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年２月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市　学校の授業以外で勉強する時間	A世帯		B世帯		
増えた	14.2	－	17.3	(3.1)	－
減った	6.2	－	6.8	(0.6)	－
変わらない	79.6	－	74.0	5.6	－
無回答	0.0	－	1.9	(1.9)	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	21.7	27.8	38.1	(16.4)	(10.3)
減った	23.2	18.6	12.0	11.2	6.6
変わらない	53.6	53.6	49.1	4.5	4.5
無回答	1.4	0.0	0.8	0.6	(0.8)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	44.7	36.3	41.8	2.9	(5.5)
減った	7.9	10.3	14.1	(6.2)	(3.8)
変わらない	46.1	53.5	43.5	2.6	10.0
無回答	1.3	0.0	0.6	0.7	(0.6)
横浜市　同上（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	28.2	29.1	37.9	(9.7)	(8.8)
変わらない	53.4	59.2	51.5	1.9	7.7
減った	8.4	7.2	7.2	1.2	0.0
そもそもない	7.6	3.0	1.5	6.1	1.5
無回答	2.3	1.5	1.9	0.4	(0.4)
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	33.6	34.6	38.2	(4.6)	(3.6)
変わらない	48.2	46.7	48.1	0.1	(1.4)
減った	10.9	7.8	8.8	2.1	(1.0)
そもそもない	6.4	8.1	3.6	2.8	4.5
無回答	0.9	2.8	1.4	(0.5)	1.4
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	1.8	2.5	2.5	(0.7)	0.0
減った	9.1	1.2	1.4	7.7	(0.2)
変わらない	89.1	95.1	93.6	(4.5)	1.5
無回答	0.0	1.2	2.5	(2.5)	(1.3)
福岡市　同上　保護者	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	14.2	14.8	22.6	(8.4)	(7.8)
減った	19.9	13.3	9.7	10.2	3.6
変わらない	65.9	71.8	67.7	(1.8)	4.1
福岡市　同上（中3）保護者	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	31.1	35.3	40.0	(8.9)	(4.7)
減った	14.7	8.4	7.4	7.3	1.0
変わらない	54.3	56.3	52.6	1.7	3.7
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	17.5	－	16.8	0.7	－
減った	6.9	－	6.0	0.9	－
変わらない	74.4	－	75.1	(0.7)	－
無回答	1.3	－	2.1	(0.8)	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	23.7	－	21.9	1.8	－
減った	5.8	－	5.5	0.3	－
変わらない	67.8	－	67.2	0.6	－
無回答	2.7	－	5.5	(2.8)	－
沖縄県　同上（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	26.2	28.6	33.2	(7.0)	(4.6)
減った	20.5	18.7	14.7	5.8	4.0
変わらない	52.0	51.2	50.1	1.9	1.1
無回答	1.3	1.5	2.0	(0.7)	(0.5)
沖縄県　同上（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	24.4	30.1	32.5	(8.1)	(2.4)
減った	16.9	18.1	14.3	2.6	3.8
変わらない	57.3	49.8	52.0	5.3	(2.2)
無回答	1.4	2.0	1.3	0.1	0.7

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 193-94；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 74；「横浜市子どもの生活実態調査」p. 263；「長野市子どもの生活状況に関す

る実態調査」p. 194；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」pp. 55-56；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 128；「沖縄子ども調査」p. 136 に基づき作成

図表 12-31. コロナで学校が休みの時の平日の過ごし方（抜粋）

日野市区「コロナで学校が休みの時の平日の過ごし方」／佐賀県「コロナウイルスの影響で学校が休みだったときの平日（月曜日～金曜日）に、あなたはどのように過ごしていましたか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	(%)	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
日野市(小5)	困窮層	周辺層	一般層		
ゲームをする	87.1	68.4	70.0	17.1	(1.6)
テレビや動画を見る	87.1	82.7	78.7	8.4	4.0
音楽を聴く、歌う	71.0	49.6	48.0	23.0	1.6
スマホやパソコンで勉強をする	19.4	15.8	15.7	3.7	0.1
学校の宿題をする	67.7	76.7	82.9	(15.2)	(6.2)
塾など学校以外の勉強をする	22.6	34.6	39.6	(17.0)	(5.0)
日野市(中2)	困窮層	周辺層	一般層		
ゲームをする	83.0	60.9	63.6	19.4	(2.7)
テレビや動画を見る	80.9	81.8	80.3	0.6	1.5
学校の宿題をする	78.7	74.5	75.6	3.1	(1.1)
スマホやパソコンで勉強をする	25.5	22.7	21.3	4.2	1.4
塾など学校以外の勉強をする	19.1	41.8	37.4	(18.3)	4.4
佐賀県（同上）	低所得世帯	－	非低所得世帯		
ゲームをしたりマンガを読む	75.2	－	74.4	0.8	－
テレビや動画を見る	80.3	－	84.5	(4.2)	－
学校の宿題をする	80.3	－	85.3	(5.0)	－
スマホやパソコンで勉強をする	18.5	－	24.6	(6.1)	－
塾の勉強をする	14.6	－	20.1	(5.5)	－

資料：「日野市子どもの生活実態調査」pp. 46-47；「佐賀県子どもの生活実態調査」p. 101 に基づき作成

②学校の授業のわからなさ

他方で、同様にいくつかの調査では、子ども（福岡市調査に限り保護者）に対して、コロナ以前に比べて「学校の授業がわからないと感じること」がどのように変化したかを質問している。これらの調査結果によれば、概して貧困世帯において「学校の授業がわからないと感じること」が「増えた」とする割合が高く、非貧困世帯とのポイント差も 10 を超えている調査が少なくない（図表 12-32）。なお、「横浜市子どもの生活実態調査」では、そのような経験は「そもそもない」という選択肢があり、小学５年生に限っては貧困世帯（21.4%）と同非貧困世帯（41.0%）との間に 19.6 ポイント差が生じている（中学２年生では 6.4 ポイント差）。この点から、貧困世帯の子どものなかには、コロナ禍の前後を問わず、非貧困世帯に比して「学校の授業がわからないと感じること」なしにいられる者が少ないものと考えられる。

また、他の調査からは、保護者から見ても学力面での課題・懸念が強まっていることが示されている。例えば、「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」では、貧困世帯の方が、非貧困世帯に比して、コロナ禍の影響として「お子さんの学力が低下した」に該当する（「とてもそう思う」＋「そう思う」）割合が高く、そのポイント差も 18 ポイントと大きい（図表 12-33）。また、コロナ禍前に比べて子どもの学力が低下することを「不安に感じている」のかを、保護者に対して質問した「横浜市子どもの生活実態調査」によれば、貧困世帯の方が非貧困世帯よりも「不安に感じている」（「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」）割合が高く、反対に不安を否定する割合が低くなって

いる。いずれについても、非貧困世帯とのポイント差は 20 前後と大きい。

図表 12-32. 学校の授業がわからないと感じること

米沢市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルスの感染拡大前と比べて、どのように変わったと思いますか。」／佐倉市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校する前（2020年2月以前）から比べて、どの様に変わったと思いますか。」／「新型コロナウイルス感染症の影響で、学校がお休みになる前（2020年2月以前）と比べて、次のようなことは増えましたか、減りましたか。今の状況について教えてください。」／長野市「あなたの現在の生活で、台風19号（令和元年東日本台風）災害や新型コロナウイルス感染症の影響で変わったことはありますか。」／福岡市「お子さんの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」／長崎市「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大前（令和2年2月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか」／沖縄県「あなたの現在の生活は、新型コロナウイルス感染症の拡大により学校が休校になる前（2020年２月以前）と比べて、どのように変わったと思いますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）		
	Ⅰ	Ⅱ		(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
米沢市 学校の授業がわからないと感じること	A世帯		B世帯		
増えた	25.7	－	14.4	11.3	－
減った	11.5	－	14.0	(2.5)	－
変わらない	61.9	－	69.0	(7.1)	－
無回答	0.9	－	2.6	(1.7)	－
佐倉市　同上（小5）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	34.8	27.2	18.8	16.0	8.4
減った	18.8	18.9	21.4	(2.6)	(2.5)
変わらない	44.9	53.6	58.1	(13.2)	(4.5)
無回答	1.4	0.3	1.7	(0.3)	(1.4)
佐倉市　同上（中2）	中央値1/2未満	1/2～中央値未満	中央値以上		
増えた	43.4	37.4	27.8	15.6	9.6
減った	11.8	10.6	11.8	0.0	(1.2)
変わらない	43.4	52.0	59.7	(16.3)	(7.7)
無回答	1.3	0.0	0.6	0.7	(0.6)
横浜市　同上（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	21.4	20.4	11.5	9.9	8.9
変わらない	46.6	44.6	36.6	10.0	8.0
減った	8.4	10.2	9.1	(0.7)	1.1
そもそもない	21.4	23.1	41.0	(19.6)	(17.9)
無回答	2.3	1.7	1.8	0.5	(0.1)
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
増えた	24.5	23.2	16.4	8.1	6.8
変わらない	54.5	53.8	55.0	(0.5)	(1.2)
減った	5.5	9.1	6.1	(0.6)	3.0
そもそもない	14.5	11.4	20.9	(6.4)	(9.5)
無回答	0.9	2.5	1.5	(0.6)	1.0
長野市　同上	困窮家庭	周辺家庭	一般家庭		
増えた	7.3	0.0	2.5	4.8	(2.5)
減った	1.8	7.4	4.5	(2.7)	2.9
変わらない	89.1	91.4	90.3	(1.2)	1.1
無回答	1.8	1.2	2.7	(0.9)	(1.5)
福岡市　同上（小6）保護者	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	31.5	21.8	13.3	18.2	8.5
減った	3.7	2.3	4.2	(0.5)	(1.9)
変わらない	64.8	75.9	82.5	(17.7)	(6.6)
福岡市　同上（中3）保護者	300万未満	300-600万未満	600万以上		
増えた	36.3	25.9	17.9	18.4	8.0
減った	3.2	4.8	5.1	(1.9)	(0.3)
変わらない	60.6	69.3	77.1	(16.5)	(7.8)
長崎市　同上（小5）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	20.0	－	15.0	5.0	－
減った	18.8	－	13.1	5.7	－
変わらない	60.0	－	69.4	(9.4)	－
無回答	1.3	－	2.5	(1.2)	－
長崎市　同上（中2）	Ⅱ層		Ⅰ層		
増えた	28.9	－	25.2	3.7	－
減った	7.0	－	7.3	(0.3)	－
変わらない	59.4	－	64.7	(5.3)	－
無回答	4.7	－	2.8	1.9	－
沖縄県　同上（小5）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	36.2	31.3	26.6	9.6	4.7
減った	14.5	17.5	17.0	(2.5)	0.5
変わらない	47.5	49.3	54.1	(6.6)	(4.8)
無回答	1.8	1.9	2.3	(0.5)	(0.4)
沖縄県　同上（中2）	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	一般層		
増えた	43.5	37.7	36.3	7.2	1.4
減った	5.7	9.7	8.9	(3.2)	0.8
変わらない	49.2	50.4	53.6	(4.4)	(3.2)
無回答	1.7	2.2	1.3	0.4	0.9

資料：「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」pp. 193-94；「佐倉市子どもの生活状況調査」pp. 75；「横浜市子どもの生活実態調査」p. 264；「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」p. 195；「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」pp. 57-58；「長崎市子どもの生活に関する実態調査」p. 129；「沖縄子ども調査」p. 138 に基づき作成

図表 12-33. 保護者から見た学力関係の課題・懸念

大田区「大田区においては、３月から５月末まで、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、公立小学校は臨時休業となりました。これによるお子さんへの影響にはどのようなものがありましたか。」／横浜市「宛名のお子さんやあなたの現在の様子について、新型コロナウイルス感染症拡大前の2020 年１月頃と比べて、次のようなことはどれくらい当てはまりますか。」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
	Ⅰ	Ⅱ			
大田区　お子さんの学力が低下した	生活困難層		非生活困難層		
とてもそう思う	22.7	－	12.5	10.2	－
そう思う	32.5	－	24.7	7.8	－
どちらともいえない	26.3	－	28.8	(2.5)	－
あまりそう思わない	11.2	－	21.7	(10.5)	－
全くそう思わない	5.0	－	10.8	(5.8)	－
無回答	2.2	－	1.5	0.7	－
大田区　同上	ひとり親調査		再掲		
とてもそう思う	18.7	－	12.5	6.2	－
そう思う	26.9	－	24.7	2.2	－
どちらともいえない	24.9	－	28.8	(3.9)	－
あまりそう思わない	14.5	－	21.7	(7.2)	－
全くそう思わない	11.6	－	10.8	0.8	－
無回答	3.3	－	1.5	1.8	－
横浜市　お子さんの勉強が遅れてしまうことを不安に感じている（小5）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	19.9	16.6	7.6	12.3	9.0
どちらかといえばあてはまる	25.0	24.9	17.5	7.5	7.4
どちらかといえばあてはまらない	20.6	18.6	17.3	3.3	1.3
あてはまらない	33.1	38.7	56.4	(23.3)	(17.7)
無回答	1.5	1.2	1.2	0.3	0.0
横浜市　同上（中2）	所得区分1	所得区分2	所得区分3		
あてはまる	21.8	18.7	10.1	11.7	8.6
どちらかといえばあてはまる	31.1	25.4	18.0	13.1	7.4
どちらかといえばあてはまらない	15.1	18.7	21.4	(6.3)	(2.7)
あてはまらない	31.1	35.4	49.8	(18.7)	(14.4)
無回答	0.8	1.9	0.7	0.1	1.2

資料:「大田区子どもの生活実態調査」及び「ひとり親家庭の生活実態に関する調査」p. 46・255 ;「横浜市子どもの生活実態調査」p. 116 に基づき作成

③困りごととしての学びの課題

それでは、子どもの学びに関連する課題は、当事者の悩み・困りごとになっているのか。この点、「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」では、子どもに対してコロナ禍の影響で「あなたが日々困っていると感じていること」を複数選択式で質問しており、同様に「佐賀県子どもの生活実態調査」では、保護者に対してコロナ禍による学校休校時に「お子さんのことで困ったこと」を複数選択式で質問している。

前者の調査について、ここでは、貧困世帯（貧困Ⅰ）が最も高い割合で選択した３項目を抽出して図表 12-34 にまとめている。調査結果によれば、貧困であるか否か、または学校段階を問わず、「生活のリズムの乱れ」が最も高い割合を占めており、「学業の遅れ」はそれに続く。３番目は小学５年生では、「友人関係」となっているが、中学２年生では、受験を控えていることもあり「将来の入試などの状況」が挙げられている。なお、いずれの項目に関しても、貧困世帯の方が、非貧困世帯よりも該当するとしている割合が高いものの、そのポイント差は大きくはない。

次いで、後者の調査に関しても、同様に貧困世帯（貧困Ⅰ）が最も高い割合で選択した３項目を抽出して図表 12-34 にまとめている。結果としては、同じく「生活リズム」が最も高い割合を占めており、僅差で「教育・学習について」が続き、最後に子どもの「昼食について」となっている。いずれの項目についても、貧困世帯と非貧困世帯のポイント差は大きくなく、「教育・学習について」に限れば非貧困世帯の方が高い割合で選択している。

図表 12-34. 困りごととしての学びの課題

神戸市「新型コロナウイルス感染症の影響で、あなたが日々困っていると感じていることは次のうちのどれですか」
＊／佐賀県「コロナウイルスの影響で学校が休校だったときに、お子さんのことで困ったことは何ですか」

	(a) 貧困（%）		(b) 非貧困		
	Ⅰ	Ⅱ	（%）	(a) Ⅰ－(b)	(a) Ⅱ－(b)
神戸市　(小5)　子ども	困窮度1	困窮度2	中央値以上		
生活のリズムの乱れ	23.6	20.1	19.6	4.0	0.5
学業（学校の授業の進み具合など）の遅れ	18.5	15.9	13.3	5.2	2.6
友人関係	15.7	12.6	12.0	3.7	0.6
神戸市　(中2)　子ども	困窮度1	困窮度2	中央値以上		
生活のリズムの乱れ	31.0	28.6	26.1	4.9	2.5
学業（学校の授業の進み具合など）の遅れ	29.2	25.3	22.9	6.3	2.4
将来の入試などの状況	25.9	26.0	25.5	0.4	0.5
佐賀県（同上）　保護者	低所得世帯		非低所得世帯		
生活リズムについて	69.1	－	67.3	1.8	－
教育・学習について	67.1	－	70.1	(3.0)	－
昼食について	39.2	－	32.3	6.9	－

資料：「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」pp. 217-219；「佐賀県子どもの生活実態調査」p. 98 に基づき作成

４．結論

ここまで、本稿では、コロナ禍が貧困状況で生活する家族（保護者・子ども）にどのような影響を与えたと考えられるのか、その実態を素描するべく「子どもの生活実態調査」の結果を分析してきた。それでは、本稿での分析結果から何が言えるのか。

第一に、本稿で取扱ったすべての調査において、貧困世帯では、非貧困世帯に比べて――地域ごとにその程度の差はあるものの――コロナ禍において、不安定な就労状況、世帯所得の減少、くらしむきや家計・支出状況の悪化、さらには、基本的必要や子どもの体験に関わる剥奪を経験していたことが指摘できる。ただし、これらのすべての状況悪化が「コロナ禍による」わけではないことに留意が必要である。

第二に、子どもの日常生活（食事の回数、睡眠・生活リズム）、精神状態、家族内での人間関係に関してもまた、概ね貧困世帯の方が、非貧困世帯に比して望ましくない状況・状態にある傾向が示されていた。ただし、その差は地域・学校段階によってばらつきがあり、非貧困世帯とのポイント差が極めて小さな場合が少なくなく、解釈の余地がある。

第三に、子どもの学び（勉強時間、授業のわからなさ）に関してもまた、貧困世帯の方が、非貧困世帯に比べて、コロナ禍において望ましくない影響を被っていたことが示されている。この点は、コロナ禍において変化したことのみならず、当事者にとっての困りごとや懸念としても示されていた。

以上３点と関連して、第四に、本稿では精査こそできなかったものの、地域ごとに貧困世帯の置かれている状況・状態が異なっており、コロナ禍が貧困世帯にもたらした影響が地域間（都市部／郡部間；地方間）で異なっている可能性――均質な影響をもたらしていない可能性――である。

以上の知見を踏まえつつ、本稿の結論を示すのであれば、以下のとおりである。改めて、本研究事業の目的を確認すると、家庭の SES が低く、かつ、コロナ禍の影響を被りながらも学力面で成果をあげている児童生徒（resilient students）に着目し、それを可能にする条件（児童生徒・家庭の状況等、学校・教育委員会等の取組）を明らかにすることであった。

そして、この目的に照らしてみると、コロナ禍で貧困世帯の子どもに生じていた学びに関する課題（勉強時間の減少、授業のわからなさ）に対しては、学校・教育委員会等がど

のような対応（追加的／補完的な働きかけの有無・内容）をしているかが重要になってくると考えられる。また、コロナ禍による日常生活、精神状態、家族内での人間関係等への影響については、学校・教育委員会が他機関（家族への介入を伴う社会福祉、医療機関等）とどのように連携できているかが重要になってくると考えられる。以上の切り口にレジリエントな児童生徒を可能にする条件が含まれていると考えられる。

しかしながら他方で、本稿の分析結果が示していたのは、貧困世帯の直面している不安定就労、世帯所得の低さ、剥奪経験がコロナ禍によりさらに悪化している状況であった。このことは、本研究事業が設定する「レジリエントな児童生徒」という問題構成において前提とされている「出身家庭の低い SES」＝本稿では貧困状況そのものの悪化を含意している。そうであるとすれば、その問題の原因は、学校教育システムの外側――労働市場での分配、税と社会保障による再分配――にあるため、学校・教育委員会等に想定されている機能の射程外にある。この点、児童生徒が適切な教育を得て学んでいくことを保障していくうえで、この前提条件（低い SES；貧困）を改善することもまた必要であろう。

（参考文献）

阿部彩，2021，「新型コロナウイルス感染症拡大による子どもへの影響」『貧困研究』27，pp.22-34.

赤石千恵子／湯澤直美，2020，「ひとり親支援の活動から」貧困研究会編『貧困研究』25，pp.47-56.

梶原豪人・近藤天之・栗原和樹，2021，「自治体による子どもの貧困実態調査の全国的把握」貧困研究会『貧困研究』27，pp.85-97.

葛西リサ，2022，「シングルマザーの居住貧困：コロナ禍の「ステイホーム」の現実」貧困研究会編『貧困研究』27，pp.13-21.

Lister，Ruth.，2020，*Poverty*，2nd edition. Polity.

中囿桐代，2021，『シングルマザーの貧困はなぜ解消されないのか：「働いても貧困」の現実と支援の課題』勁草書房.

渡辺由美子，2020，「子ども支援・学習支援の活動から」貧困研究会編『貧困研究』25，pp.57-72.

行政資料（子どもの生活実態調査）

・山形県米沢市「米沢市子どもの生活に関するアンケート調査」（https://www.city.yonezawa.yamagata.jp/6095.html）（2023/3/20 最終閲覧）

・千葉県佐倉市「佐倉市子どもの生活状況調査」（https://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/kodomoseisakuka/kodomokenri/14616.html）（2023/3/20 最終閲覧）

・東京都文京区「文京区子どもの生活状況調査」・「文京区事業利用者調査」（https://www.city.bunkyo.lg.jp/kyoiku/kosodate/kekaku/keikaku/jyoukyoutyousa.html）（2023/3/20 最終閲覧）

・東京都大田区「大田区子どもの生活実態調査」・「大田区ひとり親家庭の生活実態に関する調査」（https://www.city.ota.tokyo.jp/kuseijoho/ota_plan/kobetsu_plan/fukushi/kodomo_seikatsu_plan/hinkon-chosa_202103.html）（2023/3/20 最終閲覧）

・東京都「日野市子どもの生活実態調査」（https://www.city.hino.lg.jp/fukushi/fukushi/1013147/1018334.html）（2023/3/20 最終閲覧）

・神奈川県横浜市「横浜市子どもの生活実態調査」（https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/org/kodomo/sonota/shingikai/plan/kodomoplan2016-2021.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・福井県「福井県子どもの生活状況調査」（https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/kodomo/kodomotyousa.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・長野県長野市「長野市子どもの生活状況に関する実態調査」（https://www.city.nagano.nagano.jp/n116000/kosodate/p001552.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・三重県四日市市「四日市市子どもの生活実態調査」（https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1001000001294/index.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・兵庫県神戸市「神戸市子どもの生活状況に関する実態調査」（https://www.city.kobe.lg.jp/a57667/shise/kekaku/kodomokatekyoku/kodomotyousa2021.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・和歌山県新宮市「新宮市子どもの生活実態調査」（https://www.city.shingu.lg.jp/info/1553）（2023/3/20 最終閲覧）
・福岡県福岡市「福岡市子どもの生活状況等に関する調査」（https://www.city.fukuoka.lg.jp/kodomo-mirai/mimamori/child/kodomonoseikatsujyoukyoutounikansuruchousa.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・佐賀県「佐賀県子どもの生活実態調査」（https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00379926/index.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・佐賀県武雄市教育委員会「武雄市子どもの生活実態調査」（https://www.city.takeo.lg.jp/kyouiku/cat234/cat233/post-117.html）（2023/3/20 最終閲覧）
・長崎県長崎市「長崎市子どもの生活に関する実態調査」（https://ekao-ng.jp/know/kodomoseikatsu_chosa/）（2023/3/20 最終閲覧）
・沖縄県「沖縄子ども調査」（https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/kodomotyosa/kekkagaiyo.html）（2023/3/20 最終閲覧）